

# 間ノ田遺跡・辻子遺跡(第4次) 発掘調査報告

2005(平成17)年3月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

間ノ田遺跡・辻子遺跡のある三重県の北勢地域は、近畿地方と東海地方を結ぶ東西の結節点として古来より栄えた地域です。また、伊勢湾にも面しており、海上交通で知多半島をはじめ、遠くは関東地方とも交流がありました。こうしたことから北勢地域は多くの遺跡や文化財に恵まれた、歴史と深い関わりのある地域であります。

近年、北勢地域では第二名神高速道路や東海環状自動車道路の建設に伴い、多くの発掘調査が行われています。こうした発掘調査は、開発に伴う緊急発掘であり、調査と共に多くの遺跡が消滅しています。我々の生活が豊かになるためには、開発は避けては通れない道であります。そのため、失われていく遺跡を記録保存し、後世に伝えていくことは我々の使命であると考えております。今後は、こうして蓄積された成果が、より多方面に活用されることを切望しております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては、地元近隣の方々をはじめ、四日市市教育委員会、県土整備部の方々には多大なるご理解とご協力を頂きましたことについて、厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水康夫



## 例　　言

- 1 本書は三重県四日市市広永町に所在する間ノ田遺跡・辻子遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成13年度（主）四日市朝日線緊急地方整備道路（B改良）工事に伴い、緊急発掘調査を行ったものである。
- 3 調査費用は県土整備部が全額負担した。
- 4 調査体制は以下の通りである。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター

　　調査第一課 技師 新名 強

調査委託：株岡三リビック

- 5 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センターの調査研究Ⅰグループが行い、本書の執筆・編集に関しては調査担当者が行っている。
- 6 木製品の樹種同定は株式会社吉田生物研究所に依頼した。
- 7 調査地は、国土座標第VI系に属し、座標値は日本測地系（旧座標）で表記している。挿図の方位は全て座標北で表している。
- 8 当報告書の遺構は、掘立柱建物を除き通番で表している。また、番号の前には以下の略記号を用いている。

S B…掘立柱建物            S D…溝            S E…井戸

S K…土坑                    S X…墓

- 9 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

## 本文目次

I 前 言	1	3. 遺物	13
1. 調査の契機	1	IV 辻子遺跡（第4次）の調査成果	30
2. 調査の経過	1	1. 調査以前の状況	30
3. 調査の方法	2	2. 遺構・遺物	30
II 位置と歴史的環境	4	V 結語	33
III 間ノ田遺跡の調査成果	7	1. 間ノ田遺跡	33
1. 地形および基本層序	7	2. 辻子遺跡（第4次）	34
2. 遺構	7		

## 挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第12図 S E 33、S E 2、S E 4 平面図・断面図・立面図	16
第2図 遺跡周辺地形図	3	第13図 S E 3、S E 1 平面図・断面図・立面図	17
第3図 遺跡位置図	5	第14図 S K 7、S K 14、pit遺物出土状況図、 断面図・立面図	18
第4～5図 間ノ田遺跡遺構平面図	8・9	第15～17図 間ノ田遺跡遺物実測図	21～23
第6図 間ノ田遺跡B地区土層断面図	10	第18～20図 間ノ田遺跡木製品実測図	24～26
第7図 間ノ田遺跡A地区土層断面図	11	第21図 辻子遺跡出土遺物実測図	30
第8図 S X 30平面図・断面図、 土器出土状況図	12	第22図 辻子遺跡遺構平面図	31
第9図 S X 6平面図・土層断面図	13	第23図 辻子遺跡土層断面図	32
第10図 S B 1平面図・断面図、 pit礎板・根石出土状況図	14	第24図 間ノ田遺跡遺構変遷図	34
第11図 S B 2、S B 3平面図・断面図	15		

## 表目次

第1表 間ノ田遺跡遺構一覧表	20	第5表 間ノ田遺跡木製品観察表	29
第2～4表 間ノ田遺跡遺物観察表	27～29	第6表 辻子遺跡遺物観察表	30

## 図版目次

図版1～9 間ノ田遺跡遺構写真	35～43	図版17 辻子遺跡遺構写真	51
図版10～16 間ノ田遺跡遺物写真	44～50	図版18 辻子遺跡遺物写真	52

# I 前 言

## 1. 調査の契機

間ノ田遺跡は四日市市の北端、広永町の低位段丘および沖積低地に位置する周知の遺跡である。これまでに弥生時代後期の壺や石器剥片をはじめ、土師器や須恵器、青磁、山茶碗などが採集されており、これらの採集遺物より弥生から中世の遺跡の存在が想定されていた。また、辻子遺跡は朝日町埋罈字辻子から四日市市広永町にかけて広がる遺跡で、第二名神高速道路の建設に伴い、平成9年から11年にかけて三重県埋蔵文化財センターにおいて発掘調査が行われている。発掘調査の結果、弥生時代のから中世までの集落跡が確認されている。

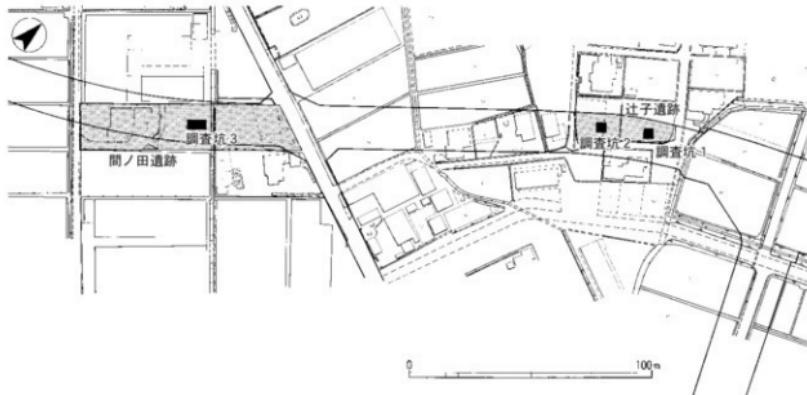
今回の発掘調査は、平成13年度（主）四日市朝日線緊急地方整備道路（B改良）工事に伴って遺跡の現状が変更される可能性があったため、県土整備部と協議を行い、平成13年1月に範囲確認調査を行つた。その結果、間ノ田遺跡についてA地区は250m<sup>2</sup>、B地区は600m<sup>2</sup>が調査対象となり、B地区において4面の造構面を確認したため調査面積は累計2,650m<sup>2</sup>となった。一方、辻子遺跡については、調査対象地に現道が存在しており、協議の結果、現道を残したまま発掘調査を行うこととなつた。そのため、完全勾配を残した結果、調査可能な面積は平面50mの2面、合計100m<sup>2</sup>であった。また、調査期間は平成13年11月19日～平成14年2月26日である。

## 2. 調査の経過

### 【間ノ田遺跡】

- ・平成13年
- 11月19～26日 B地区表土掘削。
- 11月27～28日 A地区表土掘削。
- 11月30日 調査前風景写真撮影。
- 12月3日 B地区包含層掘削開始。
- 12月5日 B地区側溝掘削。
- 12月6日 B地区第1面造構検出開始、ピット・井戸跡等を確認。
- 12月10日 S X 6 を検出(当初中世溝S D 6 と認識)  
S E 1～4、S D 5 掘削開始。
- 12月11日 S E 3 より曲物3段検出。

- 12月12日 S E 1 断面写真撮影。
- 12月14日 S E 4・S X 6 掘削。
- 12月17日 S E 1・3実測・写真撮影。
- 12月18日 S E 4 塙土より縄を多数確認。  
井戸枠検出。
- 12月19日 S E 1、S K 9・12・14実測。
- 12月25日 B地区第1面精査。  
A地区造構検出。
- 12月26日 B地区第1面全景写真撮影。  
S E 1～4写真撮影。  
B地区造構平面図実測。  
A地区側溝掘削・造構検出。
- 12月27日 B地区造構平面図実測。  
S E 3 曲物出土状況写真撮影。
- 12月28日 B地区造構平面図実測。  
S E 3 曲物取り上げ。  
安全対策、安全講習。
- ・平成14年
- 1月7日 B地区包含層掘削。  
S E 3 完掘状況写真撮影。  
A地区造構掘削開始。
- 1月8日 B地区第2面造構検出開始。  
A地区トレンチ設定。
- 1月10日 B地区第2面造構平面図実測。  
S X 30（この段階ではS D 30と認識）を検出するも造構のラインがはっきりしない。弥生土器が出土。
- 1月17日 B地区第2面全景写真撮影。  
A地区断面にてS E 32を確認。
- 1月18日 B地区包含層掘削。  
A地区全景写真撮影。
- 1月22日 A地区造構平面図実測。
- 1月23日 B地区第3面造構検出。  
A地区土層断面図実測。
- 1月24日 B地区第3面全景写真撮影（35mm）、トレンチ掘削。  
A地区S E 32掘削。A地区調査終了。
- 1月25日 B地区包含層掘削、造構がはっきりしな



第1図 調査区位置図 (1 : 2,000)

- い。
- 1月29日 小学生の社会見学予定も、降雪のため中止。雪かき。
- 1月30日 包含層掘削。
- 1月31日 第4面造構検出開始。
- 2月1日 S B 1を検出。  
S X30造構掘削。
- 2月4日 SK 9写真撮影、断面図実測。
- 2月5日 S X30周溝断面実測、平面図実測
- 2月6日 S X30土器集中部写真撮影、出土状況図実測  
S B 1のピットより礎板・根石確認
- 2月7日 B地区第4面全景写真撮影  
S X30全景写真撮影、等高線図実測
- 2月8日 B地区第4面全景写真撮影  
造構平面図実測  
B地区土層断面図実測
- 2月12日 降雪。S B 1・2周辺精査。
- 2月13日 S B 1・2全景写真撮影  
S E 4を抵抗して掘削。  
S X30にトレーナーを設定して掘削。
- 2月14日 B地区下層確認トレーナー設定・掘削  
S E 4井戸枠検出
- 2月15日 S E 4井戸枠内より山茶楓・石出土。
- 2月16日 S E 4遺物出土状況・完掘状況写真撮影  
完掘状況実測
- 2月18~23日 B地区埋め戻し
- 2月26日 安全講習、事務所撤去。調査終了。
- 【辻子遺跡】**
- ・平成13年
  - 12月6日 表土掘削開始。
  - 12月12日 包含層掘削。山茶楓・木片出土。
  - 12月17日 第1面造構検出。ピット数基礎確認  
第1面平面図実測。
  - 12月18日 第1面南半部写真撮影。包含層掘削、第2面造構検出。落ち込み確認
  - 12月19日 第2面南半部写真撮影。
  - 12月20~25日 調査区北半部包含層掘削、造構検出。  
第1面、第2面とも造構は確認できない。
  - 12月26日 第2面全景写真撮影。
  - 12月27日 土層断面図・造構平面図実測。調査終了。  
・平成14年
  - 1月23日 埋め戻し。

### 3. 調査の方法

#### (1) 地区設定・掘削方法について

間ノ田遺跡については、水路によって調査区が分断されたため、便宜的に北側からA地区・B地区と呼称した。さらに、4m四方の小地区を設定して調査を行っている。掘削については表土・盛土部分は重機にて、包含層以下については人力にて掘削を行った。



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 5,000)

辻子遺跡については、調査区底面が極めて狭く危険であるため、包含層掘削についても小重機を用いて調査を行っている。

#### (2) 遺構図面について

間ノ田遺跡について、遺構平面図・土層断面図は1/20の縮尺で手書き実測を行い、個別遺構図については、遺構に応じて1/10・1/20の縮尺で手書き実測を行っている。

辻子遺跡については、遺構平面図は1/100の縮尺でトータルステーションを用いた測量実測を行い、土層断面図は1/20の縮尺で手書き実測を行った。

#### (3) 記録写真について

間ノ田遺跡・辻子遺跡とも全景写真・主要遺構に

ついては、4×5カメラ、35mmカメラを使用して撮影を行った。遺物については室内にて6×9カメラ、4×5カメラを使用して撮影を行った。

#### (4) 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法にかかる諸通知は、以下により行っている。

・発掘調査の報告（三重県教育委員会教育長宛）

平成13年12月4日付教理第270号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（四日市北警察署宛）

平成14年3月15日付教ス生8-24号（三重県教育長通知）

## II 位置と環境

### 1. 地理的環境

間ノ田遺跡(1)・辻子遺跡(2)は、三重県の北部、四日市市と朝日町の境部分に所在する。当地は鈴鹿山脈から伊勢湾へ注ぐ朝明川の下流北岸に位置しており、北側には朝日丘陵が存在している。この丘陵上には菟上遺跡や山村遺跡、金塚遺跡・黄穴墓群、広永黄穴墓群・古墳群など多くの遺跡が存在しており、当遺跡から朝日丘陵から派生した小丘陵の先端部に位置している。

### 2. 辻子遺跡の調査成果

辻子遺跡は、平成9年から11年にかけて発掘調査が行われており、弥生時代中期から鎌倉時代までの複合遺跡で、6期にわたる遺構が確認されている<sup>(1)</sup>。

第1期は弥生時代中期で、プラント・オパール分析の結果をふまえて水田遺構が存在していたものとしている。第2期は弥生時代後期初頭で、7基の堅穴住居とともに東西2群の小区画水田を確認している。第3期は古墳時代前期で、明確な遺構は確認できていないが、集落脇の低地部で多量の土器が出土している。第4期は古墳時代中期から平安時代中期の流路跡が確認されている。第5期は平安時代後期から末期で、大型掘立柱建物が多数確認され、条里遺構も見られる。第6期は鎌倉時代掘立柱建物や中世墓、水田遺構が確認されている。

### 3. 歴史的環境

朝明川下流域では、旧石器から縄文時代にかけての遺跡は、西ヶ広遺跡(3)で縄文時代後期の土坑が僅かに確認されているのみ<sup>(2)</sup>で、ほとんど確認されていない。

弥生時代前期になると、大谷遺跡<sup>(4)</sup>や永井遺跡<sup>(5)</sup>で環濠集落が出現する。中期になると、菟上遺跡(6)で独立棟持柱式掘立柱建物や80棟を超す堅穴住居、方形周溝墓などが確認され、谷部分からも多量の木製品や土器などが出土している<sup>(6)</sup>。また、山村遺跡(7)では、20基の方形周溝墓や2条の環濠を確認している<sup>(7)</sup>。弥生時代後期になると、朝明川両岸の丘陵上で大規模な集落が見られるようになる。山奥遺跡(8)で100棟を超す堅穴住居が確認され<sup>(8)</sup>、久留信遺跡(9)では方形周溝墓が確認されている<sup>(9)</sup>。西ヶ広遺跡でも30棟近い堅穴住居が確認されている。また、伊坂遺跡(10)では扁平紐式袈裟襷文銅鐸(伊坂銅鐸)が、金塚遺跡(11)でも綾杉文を持つ銅片が出土しており<sup>(10)</sup>、当丘陵の性格を考える上で注意が必要である。

古墳時代前期には、海蔵川下流北岸に志氏神社古墳(12)が出現する。全長60mを超える前方後円墳もしくは前方後方墳と考えられ、内行花文鏡や車輪石などが出土している。中期になると古広古墳群(13)や



第3図 遺跡位置図 (1:50,000)【国土地理院 1:25,000 桑名・菰野・四日市東部・四日市西部】

淨ヶ坊古墳群(14)が築かれる。後期には削平された前方後円墳を含む城ノ古宮墳群(15)や公事出古墳群などが築かれたほか、死入谷横穴墓(16)をはじめ広永横穴墓群<sup>(17)</sup>や金塚横穴墓群<sup>(18)</sup>(11)、菟上遺跡などで横穴墓が確認されている。

古代の北勢地域には、員弁郡・桑名郡・朝明郡・三重郡の4郡が設置されており、間ノ田・辻子遺跡は朝明郡に属する。この時期は、朝明川周辺の丘陵部分で、計画配置された掘立柱建物群や倉庫群を持つ遺跡が多数確認されている。朝明川北岸では西ヶ広遺跡、奈良時代の掘立柱建物が70棟以上確認されており、円面鏡などが出土したことから、公的施設か有力氏族宅の可能性が指摘されている。菟上遺跡でも飛鳥から奈良時代にかけての掘立柱建物が多数確認されている。朝明川南岸の久留倍遺跡では、伊勢湾を見渡せる丘陵上に、溝によって区画された倉庫群や政庁とみられる建物群が相次いで確認され<sup>(19)</sup>、朝明郡衙の有力候補地となっている。古代寺院について、桑名郡には員弁川北岸に額田庵寺(18)が、朝明郡には朝日丘陵北東端部に繩生庵寺(19)が存在する。繩生庵寺では、塔心礎から唐三彩製の蓋をもつ舍利容器が出土している。

中世の朝明郡には、伊勢神宮の御厨・御薦が多数設置されている。中世前期には、辻子遺跡で条里地割りに沿った建物配置が見られる。中世後期の北勢地域は有力な大名は出現せず、北方一揆や十カ所人數と呼ばれる国人・地侍層が結合した勢力が存在している。そのため、数多くの中世城館があり、朝日丘陵にも伊坂城跡<sup>(20)</sup>(20)や広永城跡(17)が築かれている。伊坂城跡では、主郭へと続く丘陵上に、道と区画溝をもつ屋敷地が確認されている。中世の交通路としては、東海道のほか、八風峠や千草峠など北伊勢と近江を繋ぐルートが見られる。前者のルートは近江国境から滋野町田光を通り、朝明川沿いに四日市市富田辺りで東海道と繋がり、朝明川沿岸部は、交通の要衝として栄えていたことが窺える。

#### 【註】

- (1) 稲積裕昌・角正淳子ほか『辻子遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2004
- (2) 小玉道明ほか「西ヶ広遺跡」『東名古道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会ほか、1970

(3) 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会・四日市遺跡を守る会、1966

(4) 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ』四日市市教育委員会、1976

(4) 小玉道明ほか『木井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会、1973

(5) 『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ・Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、2000・2001

(6) 角正浩「山村遺跡」「金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター、2002

萩原義彦「山村遺跡(第2次)発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター、2004

(7) 清水政宏「山奥遺跡Ⅰ」四日市市教育委員会、2003

(8) 『一般国道1号線北勢バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』四日市市教育委員会、2003

(9) 服部芳人ほか『伊坂城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2004

(10) 『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター、1999

(11) 服部芳人「金塚遺跡・金塚横穴墓群」「金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター、2002

(12) 『一般国道1号線北勢バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』四日市市教育委員会、2004

(13) 竹田憲治「伊坂城跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター、2003

#### ・参考文献

『四日市市史』第二巻史料編考古Ⅰ、四日市市、1988

『四日市市史』第三巻史料編考古Ⅱ、四日市市、1993

### III 間ノ田遺跡の調査成果

#### 1. 地形及び基本層序

事業地は、かつて水田が営まれる低地であったが、その後工場用地や宅地となつたため、50cm～100cmの盛土が行われている。また、調査区内を東西に貫く水路を残して調査を行つたため、調査区を2地区に分割した。調査区は便宜上、北から「A地区」・「B地区」と呼称した。

基本層序は、表土下50cmまで現代の盛土が行われ、表土下150cm程度まで遺物を殆ど含まない中世以降の堆積層していた。その下より、黒褐色砂質土の中世の包含層(包含層1)を確認し、この層を除去した面で灰黃褐色砂質土や黒褐色シルトの遺構面(遺構第1面)を確認した。第1面下にも黒褐色砂質土の包含層(包含層2)が15cm程堆積していた。この包含層を2度に分けて遺構検出を行つたが(遺構面第2・3面)、遺構はほとんど変わらなかつた。包含層2の下で、黒褐色砂質土の包含層(包含層3)を確認し、この層を除去した面で褐灰色砂質土の地山面(遺構面第4面)を確認した。この面で下層確認調査のためトレチを設定したが、下層からは遺構や遺物は確認されなかつた。また、A地区では地山面が高くなつてゐるためか、包含層2・3は見られなかつた。

#### 2. 遺構

##### 【B地区】

この地区からは4面の遺構面を確認したが、遺構は主に弥生時代後期と中世前期に分けられる。

##### ・弥生時代後期

この時期の遺構は、2基の方形周溝墓を確認した。  
**方形周溝墓S X 30** 調査区北端に位置しており、周溝の東側が調査区外に展開するものの、ほぼ全城を確認している。溝を含めた一辺は10m、盛土部分は7.2mのほぼ正方形を呈している。削平のため盛土部分は残っておらず、埋葬部も確認できなかつた。周溝は全周せず、北端が開口する。出土遺物は甕・壺・器台が見られ、壺(3)は周溝先端部から、甕(1・2)・壺(4)・器台(5)は周溝南側から出土している。いずれも周溝埋土中位から出土しており、周溝墓内側より転落した可能性が考えられる。

**方形周溝墓S X 6** 第2面で検出した溝で、溝埋土から山茶楓など中世の遺物が出土していたことから、当初は中世の溝として理解していたが、S X 30との位置関係や、溝底部から弥生時代後期の壺(6)が出土したことから、中世の遺物は遺構の重複による混入で、当遺構は方形周溝墓の可能性が高いと判断した。周溝は北端が途切れしており、S X 33同様、一方が開口するタイプの方形周溝墓と考えられる。

##### ・中世前期

**掘立柱建物S B 1** 桁行き4間(9.6m)×梁行き3間(6.9m)を計る総柱建物で、柱間は桁行き2.1m・梁行き2.3m、方位はN-5°-Eである。北端の桁行き列からは礎板を用いたピット2つと根石を用いたピット1つを確認した。礎板はいずれも2枚の板を重ねていたものと考えられる。ピットからは土師器皿(60)・鍋(61)が出土している。

**掘立柱建物S B 2** 桁行き2間(4.5m)×梁行き2間(4.2m)の建物で、柱間は若干の誤差があるものの桁行き2.25m・梁行き2.1mを計る。方位はN-31°-E。ピットから土師器皿(62)・鍋(63)が出土。

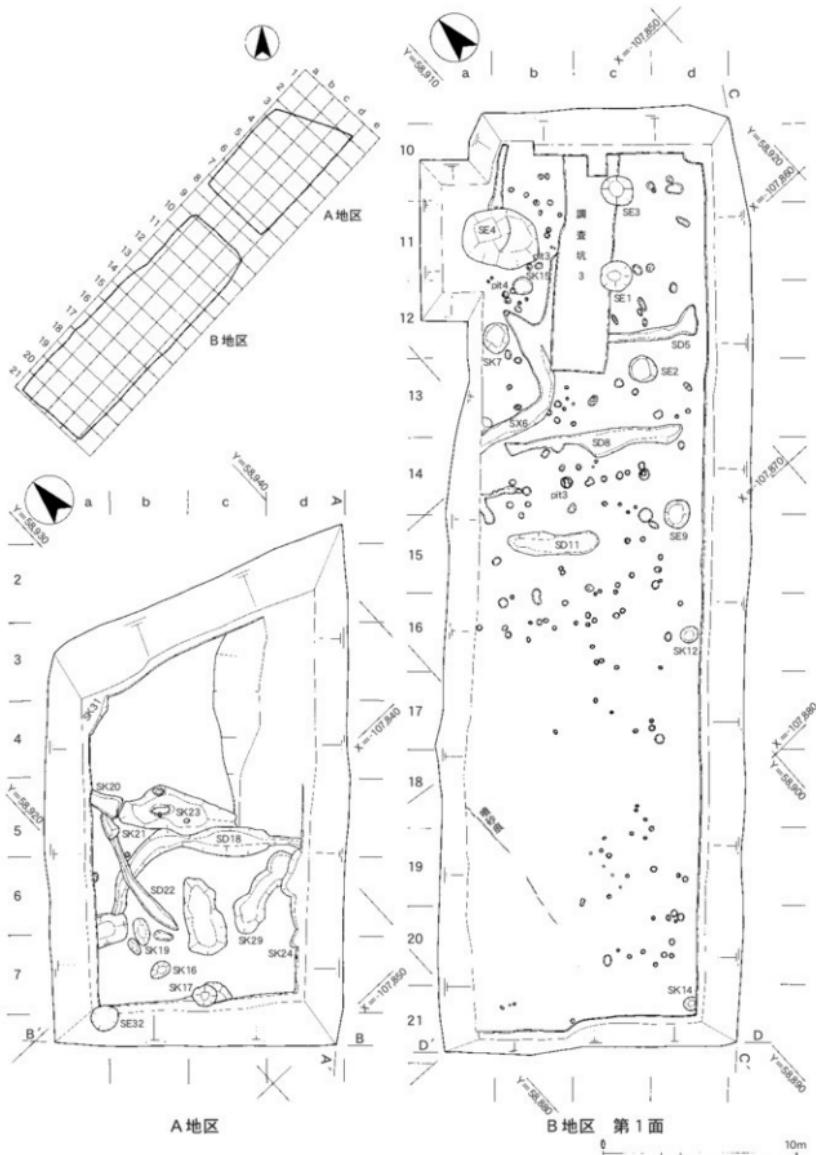
**掘立柱建物S B 3** 桁行き3間(6.3m)×梁行き2間(4.5m)の建物で、柱間は桁行き2.1m・梁行き2.25mを計る。方位はN-34°-Eである。

**井戸S E 33** 第4面より確認された井戸で、長径1.4m×短径1.2mの楕円形を呈し、深さは0.7mを計る。井戸枠や曲物などは確認されておらず、素掘りであったと考えられる。灰釉陶器碗(36・37)が出土。

**井戸S E 1** 長径1.6m×短径1.5mの楕円形を呈する。深さは0.7mで、断面は半円形を呈している。4枚の板を組み合せた井戸枠(119～122)や山茶楓(40～42)が出土している。

**井戸S E 2** 直径1.4mのほぼ円形を呈する井戸で、深さは0.9mを計る。S E 33同様、素掘りの井戸と考えられる。遺物は出土していない。

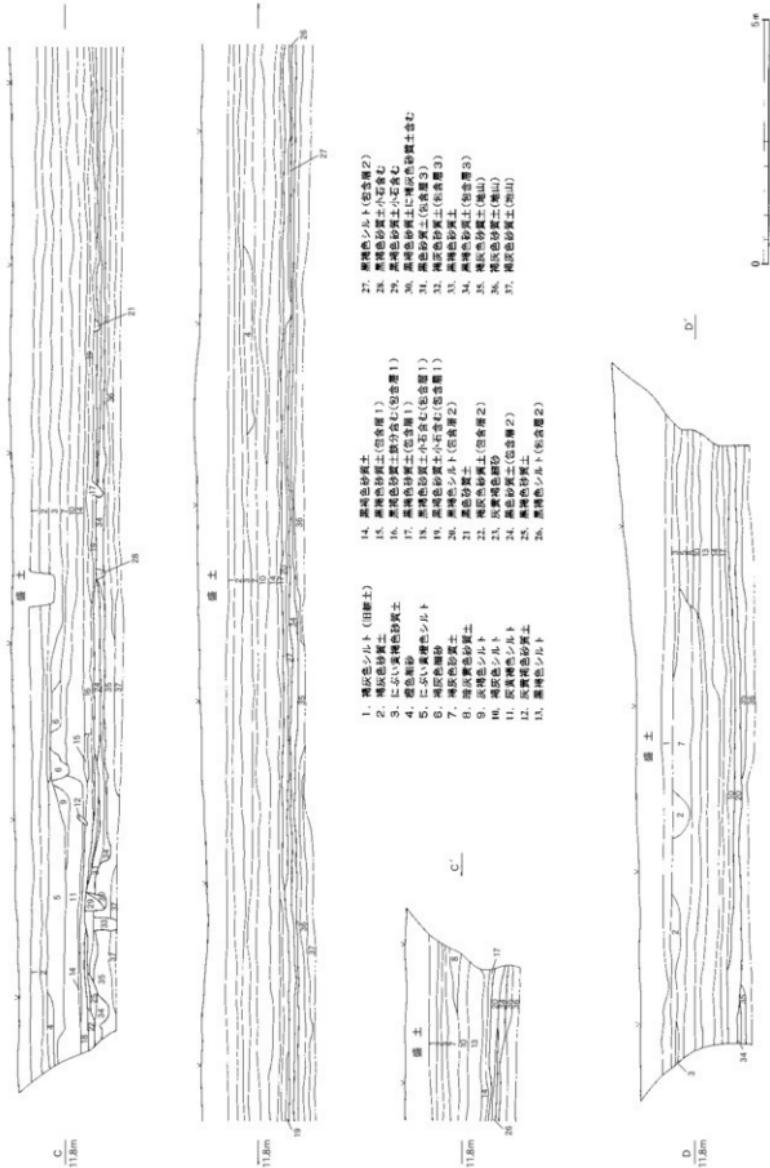
**井戸S E 3** 直径1.6m程度のほぼ円形を呈し、深さ2.1mを計る。底部には3段の曲物(123～126)が据えられていた。山茶楓(38・39)や曲物蓋(127)の他に青磁楓の小片も出土している。



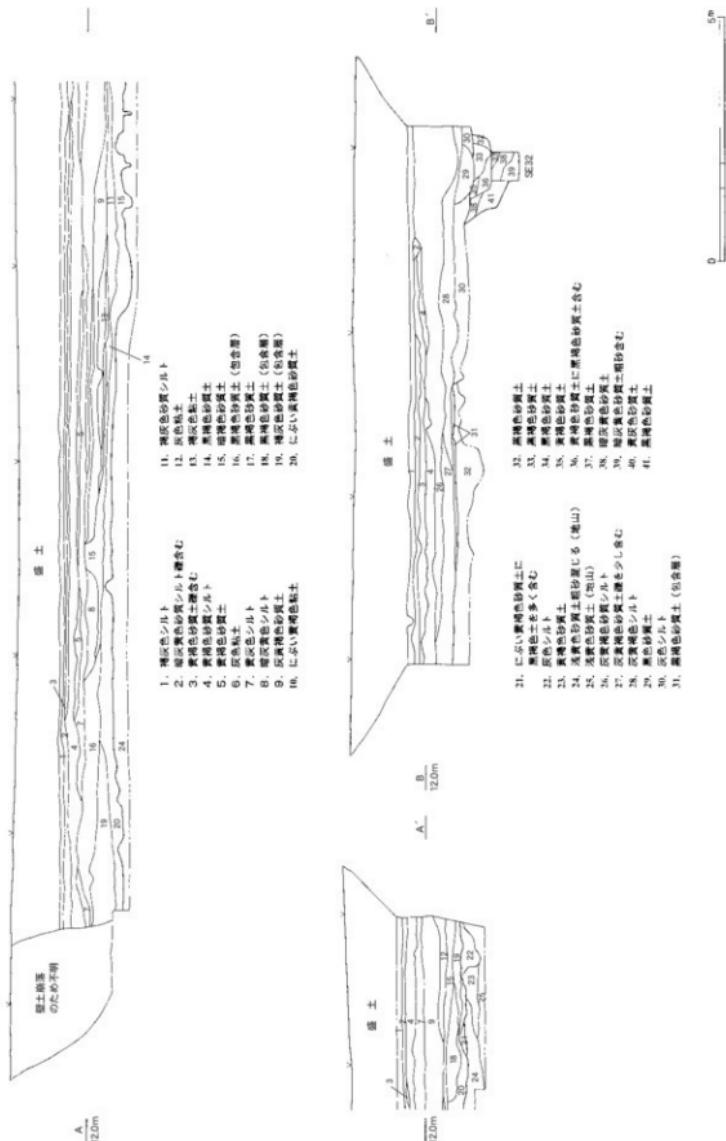
第4図 間ノ田遺跡遺構平面図 (1:250)



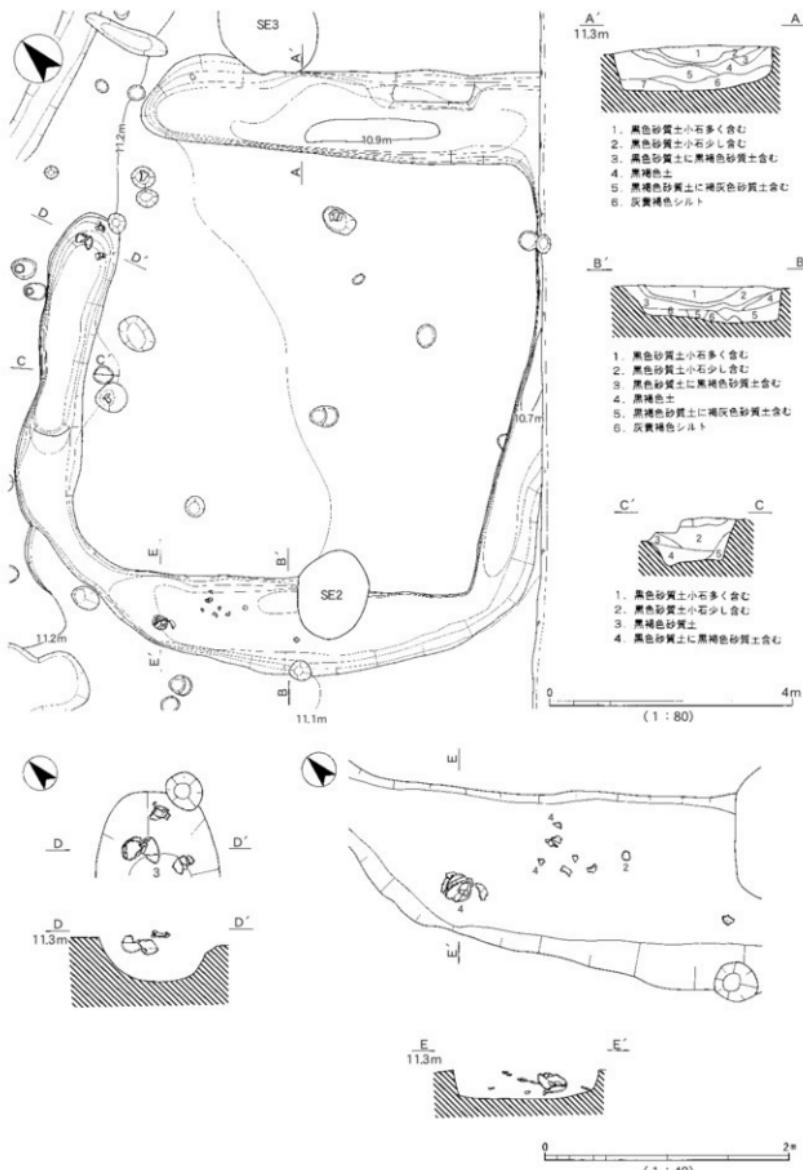
第5図 間ノ田遺跡遺構平面図 (1:250)



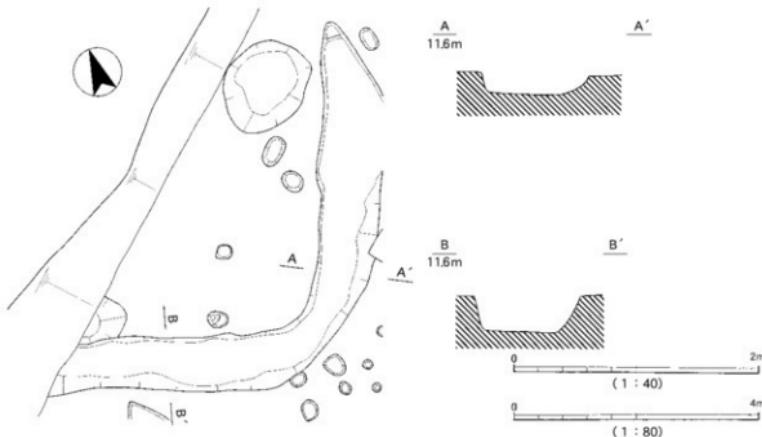
第6図 間ノ田遺跡B地区土層断面図 (1 : 100)



第7図 間ノ田遺跡A地区土層断面図 (1:100)



第8図 方形溝墓S X 30平面図・断面図 (1 : 80)、土器出土状況図 (1 : 40)



第9図 方形周溝墓 S X 6 平面図 (1 : 80)・断面図 (1 : 40)

井戸 S E 4 長径2.6m×短径2.4mの梢円形を呈し、深さは1.2mを計る。堀方は長径3.7m×短径2.6mの梢円形呈し、深さ0.5~0.7mのテラスを持っており、作業場等に用いられていた可能性が考えられる。井戸内部からは方形の井戸枠材(128~140)が出土している。井戸枠の角には2本の縦杭が残っており、本来は四角に縦杭を打ち込む。遺物は土師器皿(8)、土師質土器(9~13)、土師器甕(14)・鍋(15~18)、灰釉陶器(19~31)、山茶楢(32・33)、輪羽口(34)、土鍾(35)が出土している。

溝 S D 8 調査区北東部に位置する遺構で、溝の西端は範囲確認調査坑のために削平されている。東端はやや広がって収束する。山茶楢(59)が出土。

土坑 S K 7 長径1.6m×短径1.3mの梢円形を呈する土坑で、深さは0.3mと浅い。土師器皿(43~47)・甕(48)、灰釉陶器(49~53)などが出土している。

土坑 S K 14 長径0.9m以上×短径0.65mの梢円形を呈する土坑で、深さは0.5mを計る。埋土中位より墨書きのある山茶楢(54)が出土している。

b 11・pit 3 長径0.4m×短径0.3mの梢円形を呈するビットで、埋土中位より山茶楢(69)が出土。

b 14・pit 3 直径0.6mの不定形な円形を呈するビットで、埋土より土師器皿(64・65)・鍋(67)、灰釉陶器(66)が出土している。

#### 【A地区】

この調査区からは、溝が2条、土坑が9基、井戸が1基確認されている。

土坑 S K 24 調査区南東角に位置する遺構で、遺構の大半は側溝のため削平されていた。埋土より古式土師器皿(92)が出土しており、弥生時代末から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

井戸 S E 32 調査区南西角の壁面で確認された遺構で、遺構の大半は調査区外に展開する。堀方直径は1.9mで、深さは1.1mを計る。埋土より灰釉陶器(93)が出土している。

#### 3. 遺物

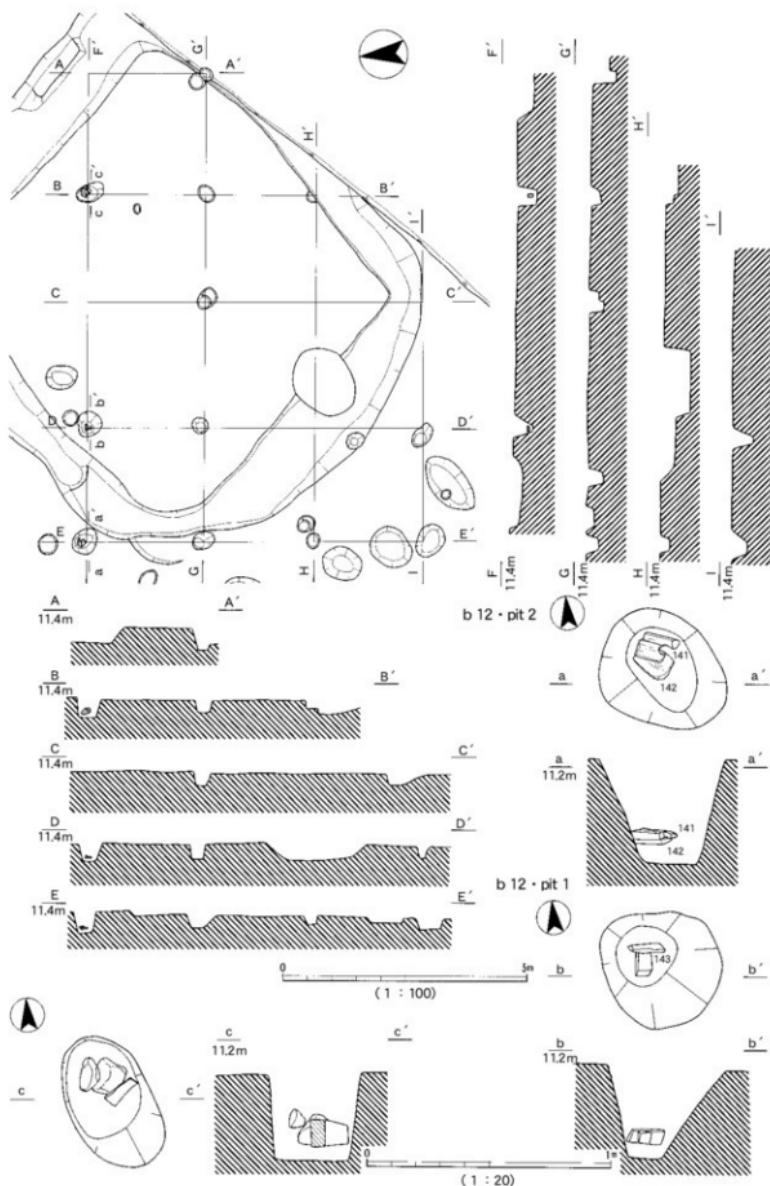
##### (1) 土器類

#### 【B地区】

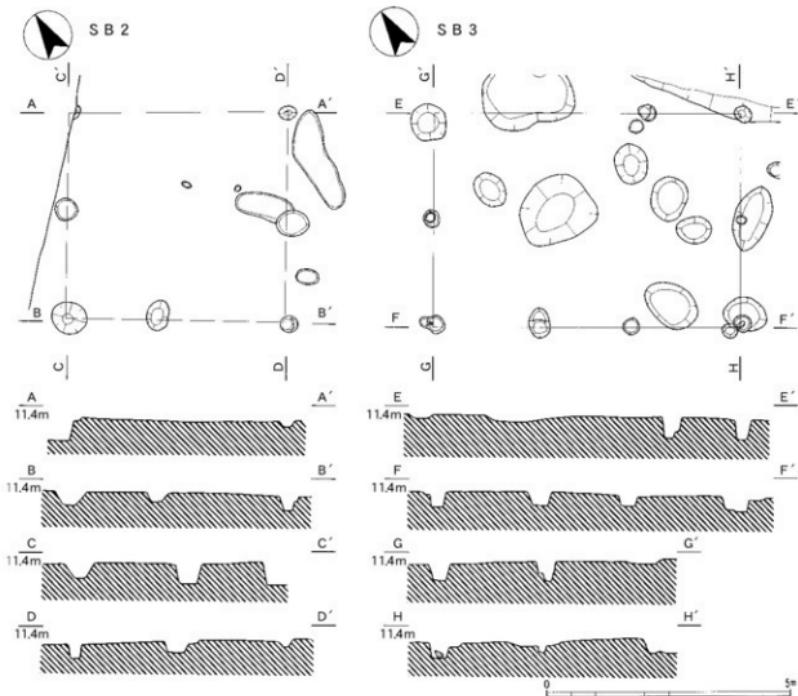
##### ・弥生時代後期

##### 方形周溝墓 S X 30出土土器(1~5)

ここからは弥生土器甕・壺・器台が出土している。1は甕の口縁部で端部にキザミを持つ。2は甕の底部で、器壁は薄く、外面にはミガキが施され、精緻な作りである。3は周溝端部より出土した壺で、口縁端部には擬凹線が施される。体部はハケ調整の後にミガキ調整が施される丁寧な作りであるが、所々にハケメが残る。また、頸部はハケ調整のみで、ミガキは施されていない。4は周溝の南側で



第10図 掘立柱建物 S B 1 平面図・断面図 (1 : 100)、pit礎板・根石出土状況図 (1 : 20)



第11図 挖立柱建物 S B 2、S B 3 平面図・断面図 (1 : 100)

出土した壺で、口縁部内面に羽状の刺突が施されている。頸部には突帯がみられる。体部外面は全体にヨコミガキが施されているが、頸部はハケ調整後にはナデ調整が行われているのみで、ミガキ調整は行われていない。5は器台で、口縁端部にキザミが見られるが、摩滅が激しく、その他の調整は不明である。上村安生氏の弥生土器編<sup>(1)</sup>、伊勢V-5様式頃のものと思われる。

#### 方形周溝墓 S X 6 出土土器(6)

ここから出土したのは弥生土器壺(6)のみである。胎土にはやや大きめの砂粒が混じっている。

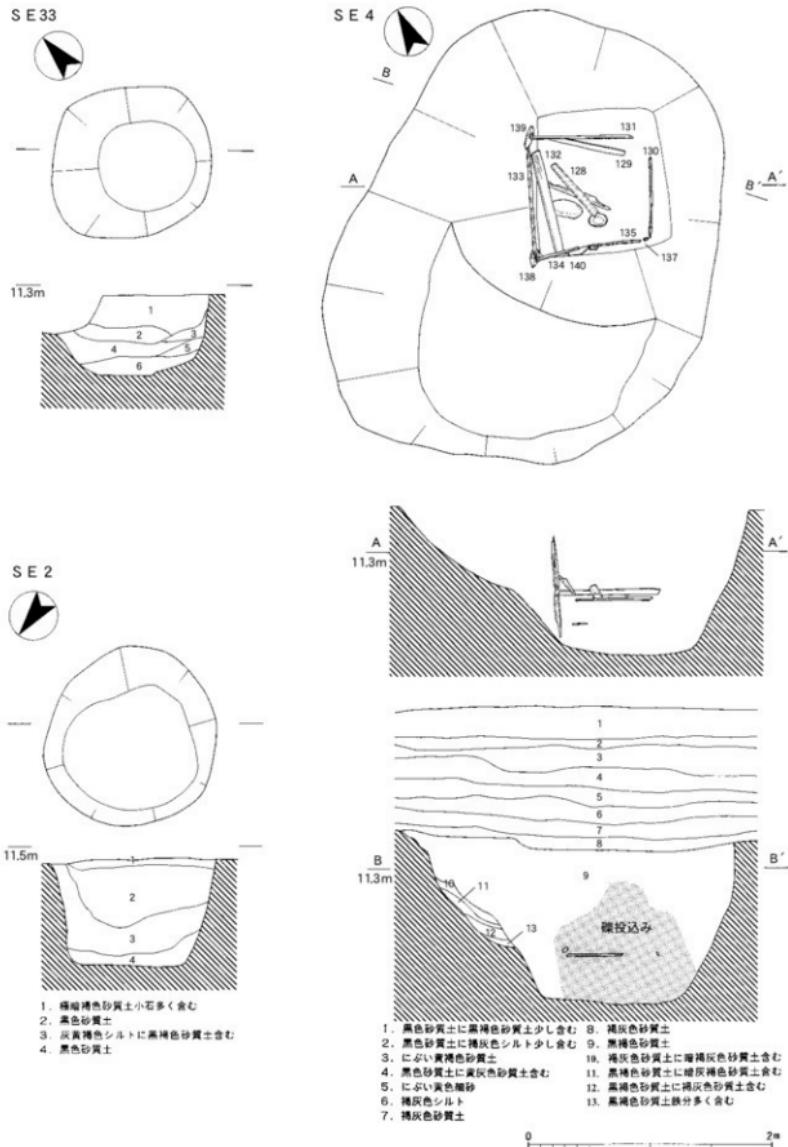
#### 土坑 S K 25 出土土器(7)

7は壺。口縁部内面に刺突、口縁端部外面には棒状浮文が見られるが、摩滅が激しく調整は不明。

・中世前期

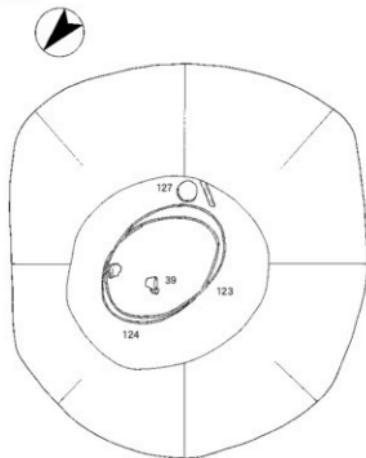
#### 井戸 S E 4 出土土器(8~35)

ここからは土師器皿、土師質土器、土師器甕・鍋、灰釉陶器、山茶碗、輪羽口、土鍤が出土している。8は土師器の小皿で口縁端部上面に面を持ち、外面は強いナデ調整が施され体部との境に稜を持つている。器壁は厚く、内面には煤が付着する。9~13は土師質土器。9は小皿で井戸枠内部から出土。器壁はやや厚く、口縁は緩やかに内湾しながら開いている。10は台付小皿であるが、焼成は完全に陶質である。11は台付小皿で、胎土には小石を含み、調整もやや粗い。12は小椀で台部は厚く、端部は外に聞く。13は皿であろうか、焼成はやや不良である。14は土師器甕で、口縁端部が内側に丸く突出する。焼成は堅緻である。15~18は羽釜系の清郷型鍋。口縁端部

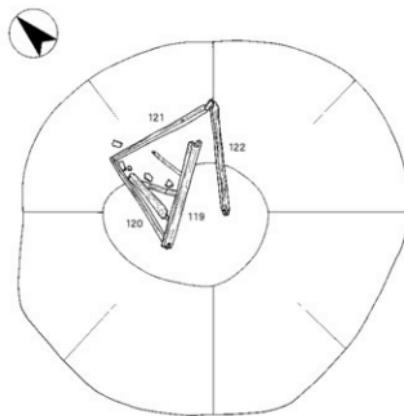


第12図 井戸SE 33、SE 2、SE 4 平面図・断面図・立面図 (1:40)

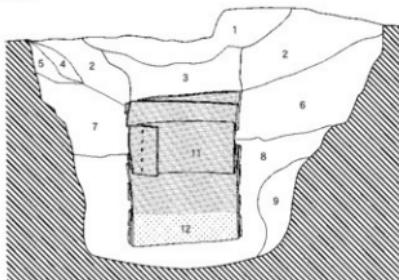
S E 3



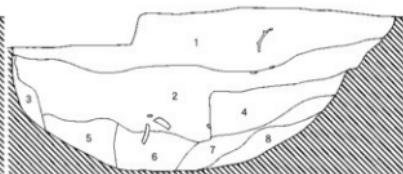
S E 1



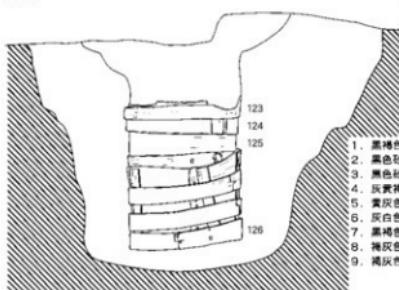
11.4m



11.4m



11.4m

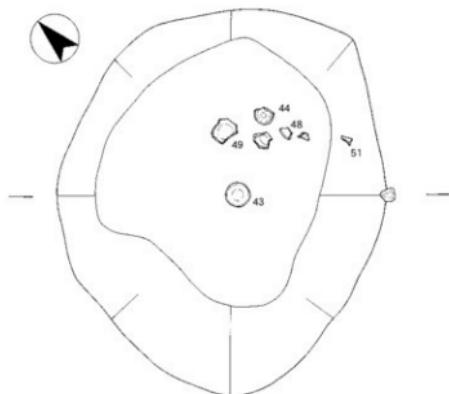


- |           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1. 黒褐色砂質土 | 18. 黒色シルト          |
| 2. 黒色砂質土  | 19. 暗灰色シルト含む       |
| 3. 黑色砂質土  | 20. 黒色砂質土に暗灰色シルト含む |
| 4. 黑色砂質土  | 21. 黒色砂質土に褐色シルト含む  |
| 5. 深灰色シルト | 22. 暗灰色シルト含む       |
| 6. 淡灰色シルト | 23. 淡灰色シルト         |
| 7. 黑褐色砂質土 | 24. 黑褐色シルト         |
| 8. 深灰色シルト | 25. 淡灰色シルト         |
| 9. 淡灰色シルト | 26. 黑褐色シルト         |

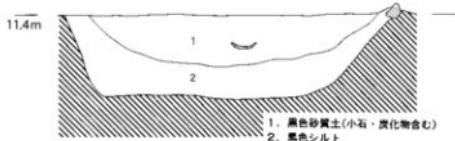
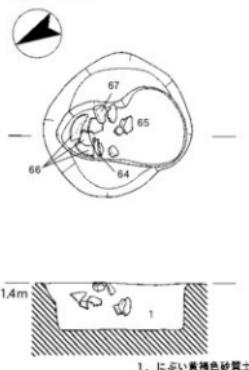


第13図 井戸 S E 3、S E 1 平面図・断面図・立面図 (1 : 20)

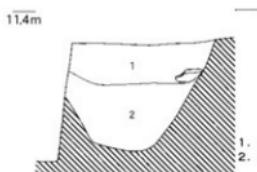
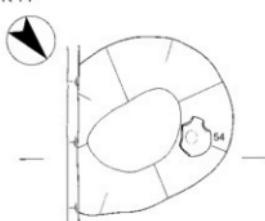
SK 7



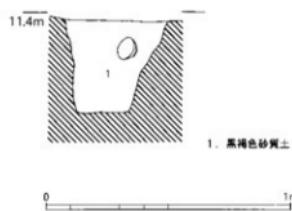
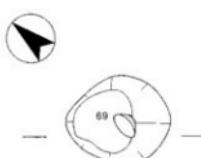
b 14 · pit 3



SK 14



b 11 · pit 3



第14図 土坑 SK 7、SK 14、pit 遺物出土状況図・断面図・立面図 (1 : 20)

は外に向かって折り返され、上面に広い面を持つ。胎土には小石が混じり、器壁は厚い。17は内外面に煤が付着している。15~17は永井氏の分類<sup>10</sup>のE類、18はF類にある。19~31は灰釉陶器椀。22は小椀で、にぶい橙色を呈する。24は内面に煤が多く付着する。いずれも百代寺窯式期<sup>11</sup>に相当する。32・33は山茶椀で、藤澤編年の第5型式に相当する。

#### 井戸 S E 33出土土器(36・37)

2点の灰釉陶器が出土。36は小椀で、ともに藤澤編年の2~3型式に相当する。

#### 井戸 S E 3 出土土器(38・39)

2点の山茶椀が出土。38は内面全体に激しく煤が付着している。藤澤編年の4~5型式に相当する。

#### 井戸 S E 1 出土土器(40~42)

3点の山茶椀が出土しており、いずれも藤澤編年の5型式に相当する。

#### 井戸状土坑 S K 7 出土土器(43~47)

43は土師器皿。口縁端部外面にくぼみを持ち、上方につまみ上げられている。内面底部には粗い仕上げハケが見られる。44~47は土師質土器の小皿。44は胎土に小石が多く混じっている。48は土師器甕。口縁端部が内側に突出する。49~52は灰釉陶器で、百代寺窯式に相当すると思われる。

#### 土坑 S K 27出土土器(53)

ここからは灰釉陶器が1点だけ出土している。

#### 土坑 S K 14出土土器(54)

山茶椀が出土。内面2は底部を除き自然釉がかかり、外部底面には「土」の墨書きが見られる。藤澤編年の5型式に相当すると思われる。

#### 溝 S D 11出土土器(55~58)

4点の山茶椀が出土。いずれも藤澤編年3型式に相当する。

#### 溝 S D 8 出土土器

山茶椀(59)が出土。藤澤編年第5型式に相当する。掘立柱建物 S B 1 出土土器(60・61)

S B 1を構成するピット内より土師質土器小皿(60)と土師器甕(61)が出土。60は器壁が厚く、端部が丸く収まる。61は羽釜系の清郷型鍋で永井分類のE類にあたり、胎土に砂粒を多く含んでいる。

#### 掘立柱建物 S B 2 出土土器(62・63)

S B 2のピット内より出土。62は土師器皿で、器

壁は厚い。63は清郷型鍋で、永井分類のE類。

#### b 14・pit 3 出土土器(64~67)

64・65は土師質土器の小皿で、65は台が付く。67は土師器甕。66は灰釉陶器で百代寺窯式期に相当。

#### b 12・pit 4 出土土器(68)

口縁部は強いナデによって真上に立ち上がり、体部外面下半には指オサエ痕が残る。

#### b 14・pit 4 70は山茶椀の小椀。藤澤編年第4型式に相当する。71は壺の底部。

#### ・包含層出土土器(72~91)

72は弥生土器鉢か。口縁端部に刺突痕が見られる。

74は弥生土器の壺底部。73は須恵器杯蓋の宝珠摘み。

73は土師質土器の台付き皿であろうか。焼成は悪く軟質である。77は土師質土器の台付き小皿。78~

80は清郷型鍋で、78は永井分類のD類、79はE類、80はF類にある。81は土師器甕で口縁端部が内側に突出し、口縁部外面には指オサエ痕が残る。82・

83は灰釉陶器。86~91山茶椀、76・85は山皿。

#### 【A地区】

##### ・弥生時代

#### 土坑 S K 25出土土器(92)

壺の口縁部で、丁寧なミガキ調整が施されている。

##### ・中世

#### 井戸 S E 32出土土器(93)

灰釉陶器が1点出土したのみである。

#### 土坑 S K 17出土土器(94~96)

94・95は山皿。96は山茶椀で、藤澤編年第5~6型式に相当する。

#### 土坑 S K 23出土土器(97・98)

97・98は山茶椀。藤澤編年の第4~5型式に相当。

#### ・包含層出土土器(99~118)

99は壺の口縁部で端部に面を持ち、口縁部内面には刺突文、外面には丁寧なミガキ調整が施される。

100は土師器皿。器壁は厚く、体部外面には指オサエ痕が残る。101は土師器甕で、口縁端部が内側に折り返さる。102は陶器の大甕。106は灰釉陶器椀。103は山皿。104・105は山茶椀の小椀。107~118は山茶椀で、藤澤編年の第5~6型式に相当する。

#### (2)木製品

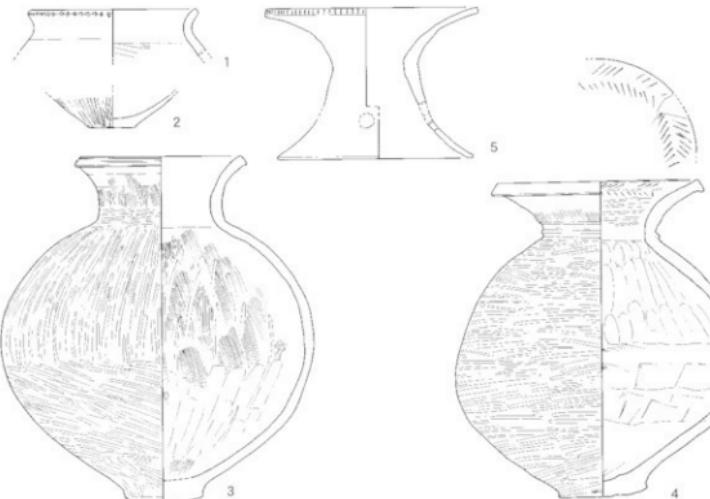
#### 井戸 S E 1 出土木製品(119~123)

S E 1からは井戸の底部で方形の井戸枠が出土し

遺構番号	地区	グリッド	検出面	形状	長径 長さ (m)	短径 幅 (m)	深さ (m)	時期	備考
SE1	B	c11	1	円形	1.6	1.5	0.7	第3期	井戸枠出土
SE2	B	c・d13	1	円形	1.4	1.4	0.9	第2期～第3期	素堀井戸
SE3	B	c10	1	円形	1.6	1.6	2.1	第3期	曲物出土
SE4	B	b11	1	不定形	3.7	2.6	1.2	第2期	井戸枠出土
SD5	B	c・d12	1	直線	4.5 以上	0.6	0.2	第2期～第3期	
SX6	B	a12～b14	1	方形？	—	—	—	第1期	
SK7	B	a・b12	1	楕円形	1.6	1.3	0.3	第2期	井戸状土坑
SD8	B	b・c12	1	直線	9.0	0.4～ 1.3	0.2	第3期	
SE9	B	d15	1	円形	1.4	1.3	0.4	第2期～第3期	
SD10	B	a15	1	L字状	1.9 以上	0.2～ 0.4	0.1	第2期～第3期	
SD11	B	b,c15	1	直線	4.7	1.2	0.2	第2期	
SK12	B	d16	1	楕円形	0.9	0.8	0.2	第2期～第3期	井戸状土坑
SK13	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番 (SK27に振り替え)
SK14	B	d21	1	楕円形	0.9	0.7	0.5	第3期	
SK15	B	b12	1	団丸方形	1.0	0.9	0.1	第2期～第3期	
SK16	A	b7	1	楕円形	1.1	0.8	0.1	第2期～第3期	
SK17	A	c7	1	楕円形	1.2	1.1	1.0	第2期～第3期	井戸状土坑
SD18	A	b6	1	蛇行	9.7 以上	0.2～ 1.5	0.1	第2期～第3期	
SK19	A	b6	1	楕円形	1.4	0.8	0.1	第2期～第3期	
SK20	A	a,b5	1	長方形	1.6 以上	1.1	0.2	第2期～第3期	
SK21	A	a,b5	1	楕円形	1.3 以上	0.6	0.1	第2期～第3期	
SD22	A	b6	1	直線	5.5 以上	0.7	0.2	第2期～第3期	
SK23	A	b5	1	楕円形	6.0	2.2	0.8	第2期～第3期	
SK24	A	d7	1	不定形	1.0 以上	0.5 以上	0.2	第1期	
SK25	B	d10	2	長方形	2.1	0.7	0.2	第1期	
SK26	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SK27	B	d14, 15	1	団丸方形	1.0	0.8	0.1	第2期～第3期	井戸状土坑、底面に工具痕？
SD28	B	d20, 21	2	直線	5.4 以上	0.8	0.1	第2期～第3期	
SK29	A	c6	1	不定形	4.7	1.0～ 1.6	0.1	第2期～第3期	
SX30	B	a11～d14	4	方形	20.0	17.0 以上	0.4	第1期	方形周溝墓
SK31	A	a4	1	不明	2.0 以上	0.6 以上	0.4	第2期～第3期	
SE32	A	a8	1	円形？	1.9	—	1.1	第2期	
SE33	B	b10	4	方形	1.4	1.2	0.7	第2期	

第1表 間ノ田遺跡遺構一覧表

S X 30 (1~5)



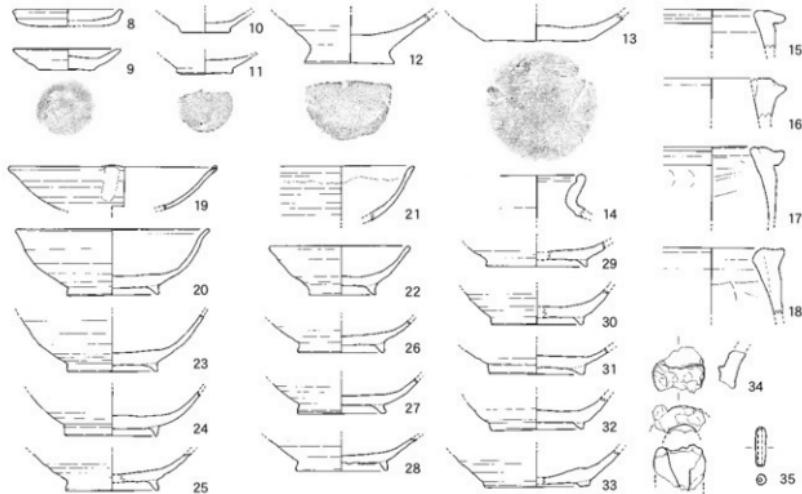
S E 6 (6)



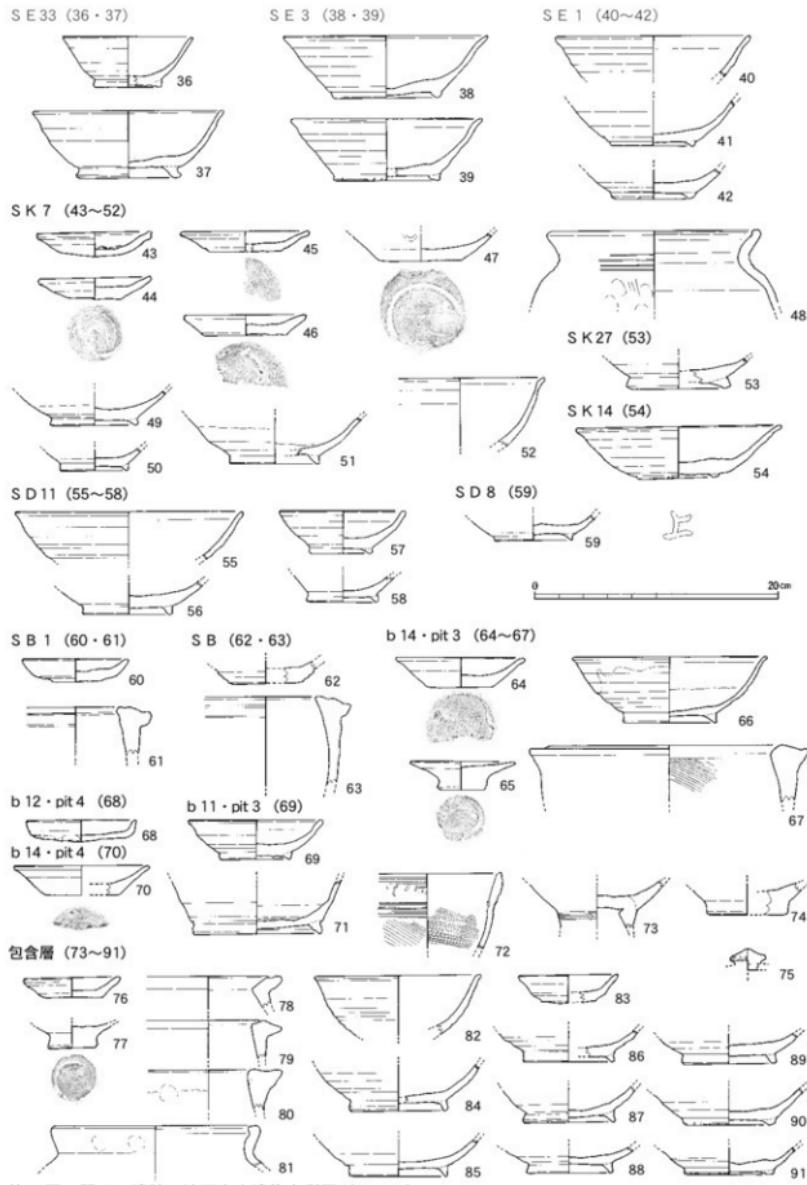
S K 25 (7)



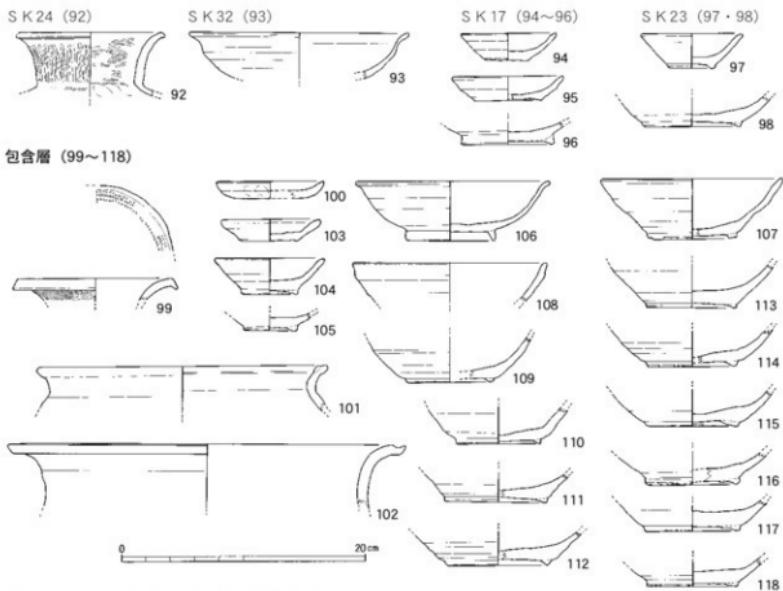
S E 4 (8~35)



第15図 間ノ田遺跡B地区出土遺物実測図 (1:4)



第16図 間ノ田跡遺跡B地区出土遺物実測図 (1 : 4)



第17図 間ノ田遺跡A地区出土遺物実測図（1：4）

た。端部が凹状のもの(119・121)と凸状のもの(120・123)があり、後者は突起部分に穿孔がみられる。121の表面には工具痕が残る。

#### 井戸S E 3出土木製品(123~127)

123~126は井戸底部に据えられていた曲物で、3段の曲物が残っていた。123は124のタガと考えられる。125には1段、126には3段のタガが残る。後者は曲物とタガの間を縦板によって固定されており、曲物底部は取水のためか穿孔が見られる。127は井戸枠内部から出土した小型の曲物の蓋であり、5つの穿孔が施され、表面には加工痕が残る。

#### 井戸S E 4出土木製品(128~140)

128~135はS E 4の井戸枠に用いられていた横板である。腐食が激しく、加工痕は確認できない。136~140は縦板。138・139は井戸枠の角を固定していたもので、先端は鋭く加工される。中央部は大きく穿孔され、横材が固定されていたものと考えられる。

#### 掘立柱建物S B 1出土木製品(141~143)

141・142は掘立柱建物S B 1のピットから出土

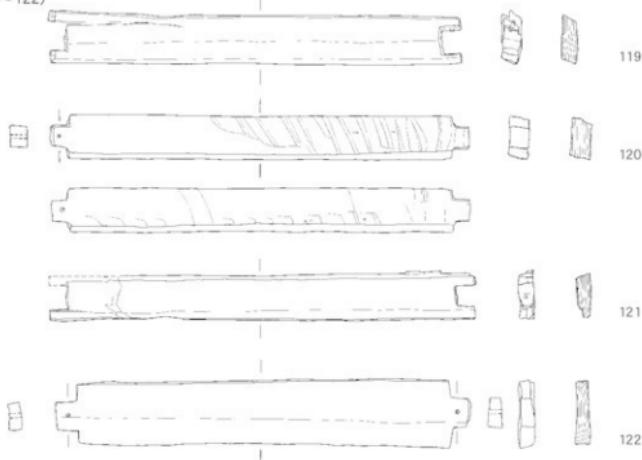
したもので、基礎板と考えられる。ともに中央端部の1ヶ所が穿孔されており、何らかの転用材と考えられる。143もS B 1の別ピットより出土したもので、前者同様転用材を基礎板として用いたと考えられるが、穿孔は見られず、表面に若干の凹凸が見られる。その他から出土した木製品(144~146)

144・145は柱材と考えられ、145は部分的に面取りと思われる加工痕が残るが、腐食が激しい。146はピットより出土したもので、中央部が凹状に加工痕が見られる。

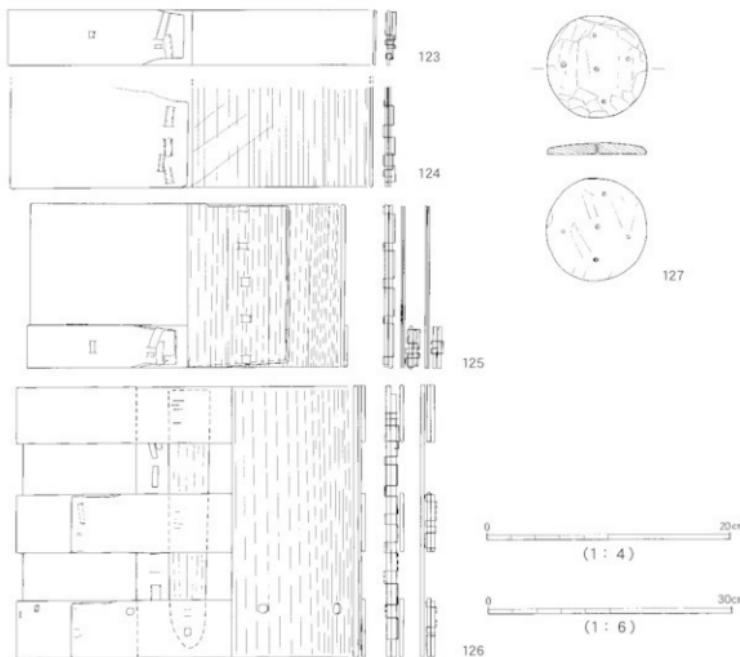
#### 【註】

- (1)上村安生「1 伊勢・伊賀地域」『東海編』木耳社、2002
- (2)永井宏幸「清野型鍋考」『年報 平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター、1996
- (3)藤澤良祐「第4章 百代寺出土遺物の検討」『瀬戸市民俗資料館研究紀要Ⅲ』瀬戸市民俗資料館、1984
- (4)藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター、1994

## S E 1 (119~122)

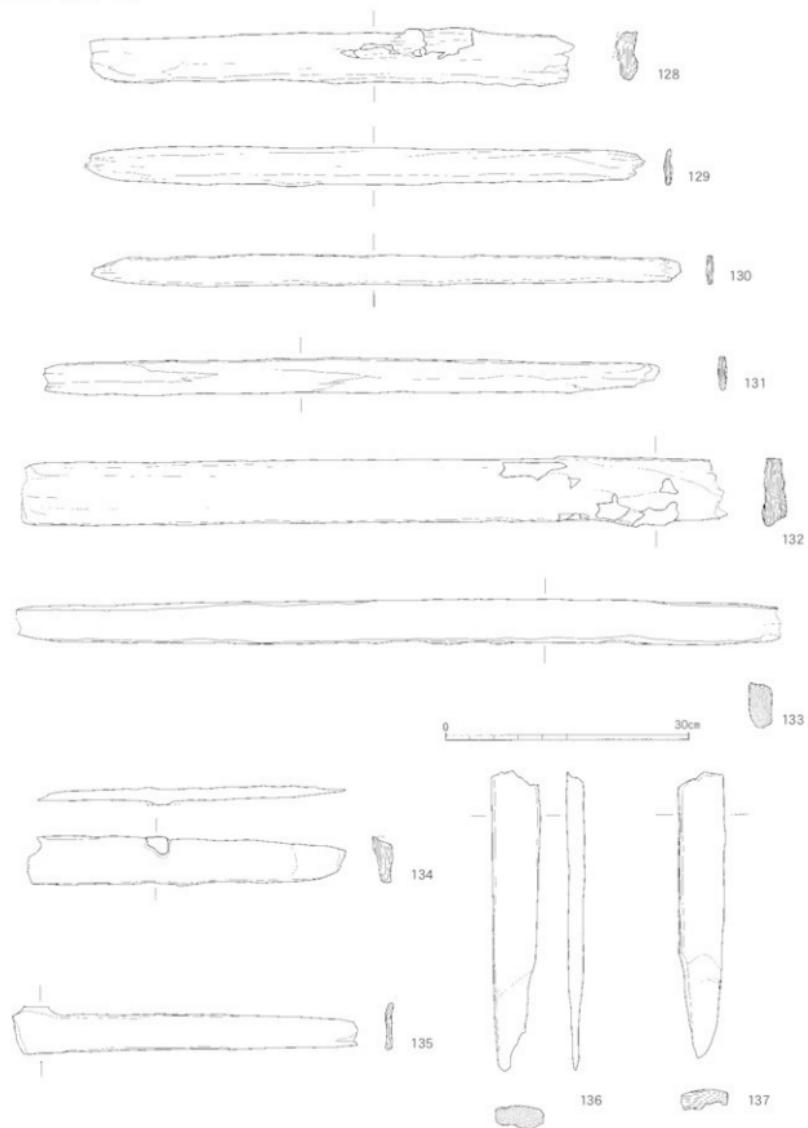


## S E 3 (123~127)



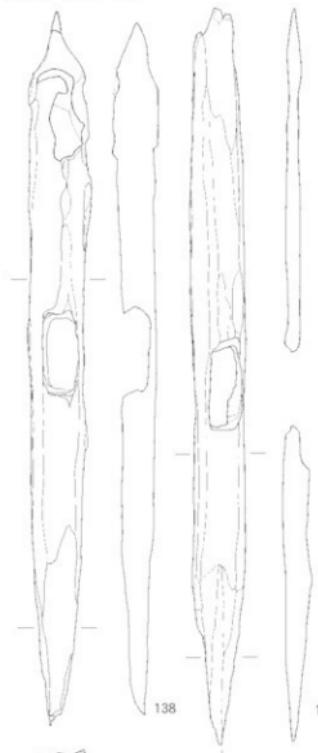
第18図 間ノ田遺跡出土木製品実測図 (1:6、127のみ1:4)

S E 4 (128~137)

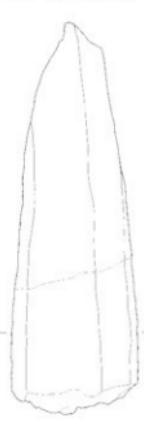


第19図 間ノ田遺跡出土木製品実測図 (1 : 6)

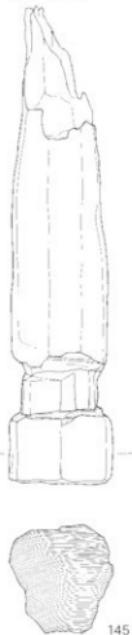
S E 4 (138~140)



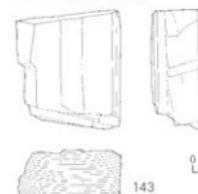
b 12・pit 1 (144)



表採 (145)

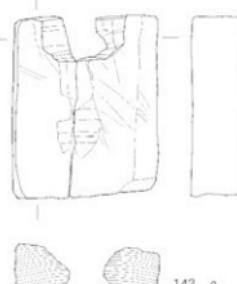
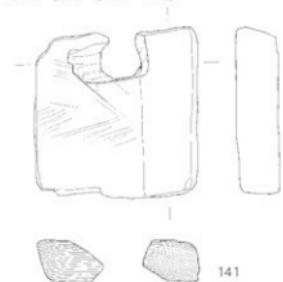


b c 12・pit 1 (143)

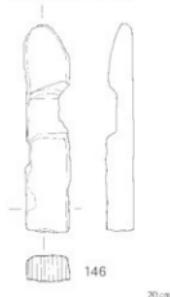


0 30cm  
(1 : 6)

b 12・pit 2 (141・142)



c 12・pit 1 (146)



0 20cm  
(1 : 4)

第20図 間ノ田遺跡出土木製品実測図

(138~140・144・145は1:6、141~143・146は1:4)

番号	登録番号	種別器形	地区	グリッド	遺構層位	計測値(cm)			調整	胎土	焼成	色調	残存	備考	
						口径	器高	底径台性							
1	29-1	土師器甕	B	b・c13	SX30	14.0	—	—	ヨコナデ・ハケメキザミ	良	良	純い檻	口縁2/12		
2	29-4	土師器甕	B	b・c13	SX30	—	—	3.6	ミガキ・ナデ	良	良	純い黄檻	底部完存		
3	31-1	土師器甕	B	b・c11	SX30	14.8	28.1	6.3	擬圓錐、ナデ→ハケ、ハケ→ミガキ・ナデ	粗	良	灰白	4/12	体部径 25.8cm	
4	30-1	土師器甕	B	—	SX30	17.4	25.9	7.3	ハケ→ナデ、ヨコミガキ、刺突文、ナデ、オサエ	良	不良	檻	9/12	体部径 23.0cm	
5	31-2	土師器器台	B	c13	SX30	17.5	—	16.1	口縁部キザミ、調整不明	良	不良	檻	口縁5/12		
6	9-1	土師器甕	B	—	SX6	—	—	5.5	ハケ	良	良	純い黄檻	底部完存		
7	10-2	土師器甕	B	d10	SK25	16.3	—	—	ナデ、キザミ、刺突文	良	良	浅黄檻	口縁2/12		
8	2-3	土師器皿	B	b11	SE4	8.6	1.4	—	ナデ	良	不良	灰白	口縁3/12	内面に焼付着	
9	5-2	土師質器皿	B	b10	SE4	8.7	1.7	4.5	クロナデ、底部糸切り痕	良	良	純い檻	底部完存		
10	2-5	土師質器皿	B	b11	SE4	—	—	3.9	ナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部9/12	焼成は陶質	
11	2-8	土師質器皿	B	b11	SE4	—	—	3.1	クロナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部8/12		
12	2-2	土師質器皿	B	b11	SE4	—	—	7.2	クロナデ、底部糸切り痕	密	良	純い檻	底部6/12		
13	2-1	土師質器皿	B	b11	SE4	—	—	8.6	ナデ、底部糸切り痕	粗	不良	褐灰	底部完存		
14	2-7	土師器甕	B	b11	SE4	—	—	—	ナデ	粗	良	灰白	小片		
15	4-5	土師器皿	B	b11	SE4	—	—	—	ナデ	粗	良	純い檻	小片		
16	4-4	土師器皿	B	b11	SE4	—	—	—	ナデ	粗	良	純い赤檻	小片		
17	4-3	土師器皿	B	a11	SE4	—	—	—	ナデ	粗	良	純い赤檻	小片	内外面に焼付着	
18	4-2	土師器皿	B	a11	SE4	—	—	—	ナデ	粗	良	灰褪	小片		
19	2-4	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	16.8	—	—	クロナデ	密	良	灰白	口縁2/12		
20	2-6	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	—	クロナデ	密	良	灰白	小片		
21	17-1	陶器灰軸輪	B	a*b11	SE4	15.7	5.4	7.4	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	口縁11/12		
22	1-8	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	11.2	4.0	5.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	不良	純い檻	3/12		
23	17-2	陶器灰軸輪	B	a*b11	SE4	—	—	7.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部10/12		
24	1-10	陶器灰軸輪	B	a11	SE4	—	—	7.5	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	内面に焼付着	
25	1-4	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	7.2	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12		
26	1-3	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	6.8	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部6/12		
27	1-2	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	7.0	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部9/12	内面使用痕	
28	1-1	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	7.2	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	黄灰	底部完存	内面使用痕	
29	1-9	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	8.0	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12		
30	1-6	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	7.1	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12	内面使用痕	
31	1-5	陶器灰軸輪	B	b11	SE4	—	—	7.6	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部6/12	井戸枠底出土 内面使用痕	
32	17-3	陶器山茶梅	B	a*b11	SE4	—	—	7.1	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	内面使用痕	
33	1-7	陶器山茶梅	B	a11	SE4	—	—	7.6	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部6/12	高台に移動痕	
34	2-10	輪羽口	B	b11	SE4	—	—	—	—	密	良	赤褐	小片		
35	2-9	土鍤	B	b11	SE4	長さ 3.2	直径 0.8	—	—	密	良	灰白	完存	重さ 1.51g	
36	8-2	陶器山茶梅	B	b10	SE33	10.5	4.1	5.4	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12		
37	8-5	陶器山茶梅	B	b10	SE33	15.4	5.5	8.0	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部8/12		
38	7-1	陶器山茶梅	B	c10	SE3	16.6	5.1	8.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰	底部完存	内面焼付着	
39	7-2	陶器山茶梅	B	c10	SE3	15.5	5.1	8.4	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部6/12		
40	3-5	陶器山茶梅	B	b11-c12	SE1	15.7	—	—	クロナデ	密	良	灰白	口縁2/12		
41	3-1	陶器灰軸輪	B	b11-c12	SE1	—	—	6.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存		
42	3-4	陶器灰軸輪	B	c11	SE1	—	—	5.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	内面使用痕	
43	3-8	土師器皿	B	b12	SK7	9.0	2.0	—	ナデ、内面ハケ	密	良	純い黄檻	底部4/12		
44	5-3	土師質器皿	B	b12	SK7	9.0	1.7	4.2	クロナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰黄	口縁4/12		
45	5-5	土師質器皿	B	a*b12	SK7	10.1	1.7	5.9	クロナデ、底部糸切り痕	密	良	檻	4/12		
46	3-4	土師質器皿	B	a*b12	SK7	9.5	1.7	6.7	クロナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰黄	口縁3/12		
47	5-1	土師質土器皿	B	a*b12	SK7	—	—	6.8	クロナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部完存		
48	4-1	土師器甕	B	b12	SK7	16.5	—	—	ナデ、オサエ、頸部外面に横擦	粗	不良	灰白	口縁2/12		
49	3-2	陶器灰軸輪	B	b12	SK7	—	—	6.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	内面使用痕	
50	3-3	陶器灰軸輪	B	a*b12	SK7	—	—	5.3	クロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	内面使用痕	

第2表 間ノ田遺跡遺物一覧表

番号	登録番号	種別器形	地区	グリッド	遺構層位	計測値(cm)			調整	胎土	他成	色調	残存	備考
						口径	器高	底径						
51	3-7	陶器灰釉陶	B	b12	SK7	—	—	7.0	ロクロナデ、貼付高台	密	良	純い黄緑	底部4/12	
52	3-6	陶器灰釉陶	B	a+b12	SK7	—	—	—	ロクロナデ	密	良	褐色	小片	
53	8-4	陶器灰釉陶	B	d15	SK27	—	—	7.5	ロクロナデ、貼付高台	密	良	灰白	底部3/12	
54	6-6	陶器山茶陶	B	d21	SK14	16.7	4.3	6.5	ロクロナデ、貼付高台	密	良	灰	8/12	底部墨書き「上」 高台粉被痕
55	7-3	陶器山茶陶	B	c15	SD11	18.5	—	—	ロクロナデ	密	良	灰白	口縁3/12	
56	6-5	陶器山茶陶	B	b15	SD11	—	—	7.0	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	内面使用痕
57	6-3	陶器山茶陶	B	b15	SD11	10.3	3.6	—	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	完存	
58	6-4	須恵器蓋	B	b15	SD11	—	—	5.6	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	
59	8-3	陶器山茶陶	B	c14	SD8	—	—	6.3	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	8/12	高台に粉被痕
60	10-1	土師質器皿	B	d12	pit2	8.5	1.9	—	ロクロナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰白	9/12	掘立柱建物SB1
61	8-8	土師器皿	B	b11	pit7	—	—	—	ナデ	粗	良	灰褐色	小片	掘立柱建物SB1
62	9-2	土師器皿	B	b14	pit5	—	—	6.0	ナデ	粗	良	黄灰	底部3/12	掘立柱建物SB2
63	8-7	土師器皿	B	b14	pit5	—	—	—	ナデ	粗	不良	橙	小片	掘立柱建物SB2
64	9-5	土師器皿	B	b14	pit3	10.5	2.1	—	ロクロナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	6/12	
65	9-6	土師器皿	B	b14	pit3	8.4	3.5	3.5	ロクロナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	
66	6-2	陶器灰釉陶	B	b14	pit3	15.1	5.4	7.5	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	6/12	
67	10-4	土師器皿	B	b14	pit3	18.7	—	—	ナデ、ハケ	粗	良	明赤褐色	口縁2/12	
68	6-1	土師器皿	B	b12	pit4	8.6	1.7	—	ナデ、オサエ	密	良	灰白	完存	口縁8.6cm～ 7.2cm(盃み大)
69	8-1	陶器山皿	B	b11	pit3	10.8	3.2	5.7	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	ほぼ完存	
70	9-4	陶器山茶陶	B	b14	pit4	11.0	2.4	6.0	ロクロナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	3/12	
71	9-3	陶器蓋	B	b14	pit4	—	—	10.4	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切→ナデ	粗	良	灰白	底部6/12	
72	11-5	赤生土器鉢?	B	b13	包含層	—	—	—	ナデ、ハケ、口縁繩刺突文、頸部横接横 縫文	粗	良	純い黄灰	小片	
73	15-7	土師器皿?	B	a10	包含層	—	—	—	ナデ	密	良	灰白	小片	
74	11-6	弥生土器蓋	B	—	包含層	—	—	5.8	ナデ	粗	良	灰白	小片	
75	8-6	須恵器杯蓋	B	c14	包含層	—	—	—	ロクロナデ	密	良	灰	小片	
76	12-7	陶器山皿	B	—	包含層	7.6	1.7	4.5	ロクロナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	6/12	
77	11-7	土師質土器皿	B	—	包含層	—	—	3.7	ロクロナデ、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部完存	
78	11-2	土師器皿	B	—	包含層	—	—	—	ナデ	粗	良	明赤褐色	小片	
79	11-3	土師器皿	B	b16	包含層	—	—	—	ナデ	粗	良	純い赤褐色	小片	
80	11-4	土師器皿	B	c16	包含層	—	—	—	ナデ	粗	良	純い黄灰	小片	
81	11-1	土師器皿	B	b15	包含層	17.2	—	—	ナデ	粗	良	純い橙	小片	
82	11-8	陶器灰釉陶	B	a11-12	包含層	13.4	—	—	ロクロナデ	密	良	灰白	口縁2/12	
83	11-9	陶器灰釉陶	B	a11-12	包含層	—	—	7.6	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部2/12	
84	15-2	陶器山茶陶	B	—	包含層	—	—	7.8	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	
85	12-8	陶器山茶陶	B	c15	包含層	7.9	2.7	—	ロクロナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	2/12	
86	12-6	陶器山茶陶	B	d17	包含層	—	—	7.4	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部5/12	内面に重複き痕 台部に粉被痕
87	12-5	陶器山茶陶	B	—	包含層	—	—	7.3	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	
88	12-4	陶器山茶陶	B	—	包含層	—	—	6.6	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部9/12	
89	12-2	陶器山茶陶	B	—	包含層	—	—	7.1	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部6/12	内面使用痕
90	12-1	陶器山茶陶	B	a10	包含層	—	—	6.8	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	
91	12-3	陶器山茶陶	B	—	包含層	—	—	6.5	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部9/12	台部に粉被痕
92	13-7	古式土器蓋	A	d7	SK27	11.6	—	—	ナデ→ミガキ、ハケ、オサエ	粗	良	純い橙	小片	
93	13-8	陶器灰釉陶	A	b8	SE32	18.0	—	—	ロクロナデ	密	良	灰白	口縁2/12	
94	14-3	陶器山茶陶	A	—	SK17	7.7	2.2	3.8	ロクロナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	8/12	
95	14-5	陶器山茶陶	A	c7	SK17	—	—	7.6	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部4/12	台部に粉被痕
96	14-4	陶器山茶陶	A	c7	SK17	—	—	7.3	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部7/12	
97	14-1	陶器山茶陶	A	c5	SK23	8.0	2.8	3.2	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	純い橙	4/12	
98	13-6	陶器山茶陶	A	b5	SK23	—	—	7.7	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕、 内面仕上げナデ	密	良	灰白	底部6/12	台部に粉被痕
99	16-3	土師器蓋	A	d7	包含層	12.6	—	—	ミガキ、口縁内部刺突文	密	良	浅黄緑	口縁3/12	

第3表 間ノ田遺跡遺物一覧表

番号	登録番号	種別器形	地区	グリッド	遺構層位	計測値(cm)			調整	胎土	焼成	色調	残存	備考
						口径	器高	底径台径						
100	16-2	土師器甕	A	d7	包含層	23.6	—	—	ナデ	密	良	灰白	口縁1/12	口縁部に焼付着
101	16-1	土師器甕	A	d3	包含層	32.6	—	—	ナデ、工具ナデ	密	良	鈍い赤褐色	口縁3/12	常滑産
102	16-5	土師器皿	A	a10-12	包含層	8.8	1.9	—	ナデ、オサエ	密	良	灰白	4/12	
103	15-9	陶器山皿	A	c6	包含層	7.8	1.6	4.2	ナデ、底部糸切り痕	密	良	灰白	7/12	
104	13-5	陶器山茶碗	A	d4	包含層	8.9	2.9	4.3	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	6/12	
105	15-8	陶器山茶碗	A	c6	包含層	—	—	4.1	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部完存	
106	15-1	陶器山茶碗	A	b6	包含層	15.8	4.9	7.0	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	7/12	内面に使用痕
107	15-5	陶器山茶碗	A	d7	包含層	14.8	4.9	6.2	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	5/12	台部に移體痕
108	16-4	陶器山茶碗	A	c6	包含層	15.8	—	—	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	口縁1/12	
109	13-1	陶器山茶碗	A	—	包含層	—	—	6.7	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12	使用痕・移體痕
110	15-4	陶器山茶碗	A	b6	包含層	—	—	6.7	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部9/12	台部に移體痕
111	13-2	陶器山茶碗	A	d3	包含層	—	—	8.4	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12	
112	13-4	陶器山茶碗	A	d4	包含層	—	—	8.1	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部4/12	
113	13-3	陶器山茶碗	A	d4	包含層	—	—	7.3	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部4/12	
114	15-6	陶器山茶碗	A	d7	包含層	—	—	6.6	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部完存	台部に移體痕
115	14-6	陶器山茶碗	A	c7	包含層	—	—	7.0	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部4/12	台部に移體痕
116	14-2	陶器山茶碗	A	c5	包含層	—	—	7.3	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	密	良	灰白	底部4/12	台部に移體痕
117	15-3	陶器山茶碗	A	d3	包含層	—	—	7.8	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部3/12	台部に移體痕
118	14-7	陶器山茶碗	A	c7	包含層	—	—	7.4	ロクロナデ、貼付高台、底部糸切り痕	粗	良	灰白	底部完存	台部に移體痕

第4表 間ノ田遺跡遺物一覧表

番号	登録番号	種別器形	地区	グリッド	遺構層位	計測値(cm)			加工ほか	樹種	残存	備考	
						長さ	幅	厚さ					
119	23-2	井戸枠・横材	B	c11-12	SE1	51.2	6.0	2.5	表面に工具痕残る。木釘あり	スギ	完存	圓材	
120	23-3	井戸枠・横材	B	c11-12	SE1	51.9	5.2	2.7	表面に工具痕残る。木釘あり	スギ	完存	凸材	
121	23-4	井戸枠・横材	B	c11-12	SE1	52.8	5.5	1.9	表面に一部剥離。木釘あり	スギ	ほぼ完存	圓材	
122	23-5	井戸枠・横材	B	c11-12	SE1	51.4	7.7	2.0	木釘あり	スギ	完存	凸材	
123	28-1	曲物	B	b-c10	SE3	44.6	6.6	0.3	縦じ紐2ヶ所あり	アスナロ	一部欠損	タガ	
124	28-2	曲物	B	b-c10	SE3	44.0	—	0.3	縦じ紐2ヶ所あり	スギ	一部欠損		
125	19-3	曲物	B	b-c10	SE3	39.5	20.2	0.5	縦じ紐2ヶ所あり	スギ	完存	厚さ2.3cm(タガ含む)	
126	22-1	曲物	B	b-c10	SE3	43.0	33.5	0.6	タガ3条、縦板3本。縦じ紐3ヶ所あり。下部10cm所に穿孔あり	アスナロ	完存	厚さ2.2cm(タガ含む)	
127	24-2	曲物蓋	B	b-c10	SE3	8.3	8.2	0.9	両面に工具痕残る。5ヶ所に穿孔あり	スギ	完存		
128	18-4	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	60.0	6.2	2.8	表面に工具痕残る。5ヶ所に穿孔あり	スギ	一部欠損		
129	18-2	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	69.5	4.8	1.0	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
130	18-3	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	73.0	3.6	0.8	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
131	20-3	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	76.5	4.3	1.1	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
132	20-2	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	87.0	8.3	3.0	表面腐食激しい	スギ	ほぼ完存		
133	20-1	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	95.0	5.5	2.8	表面腐食激しい	スギ	ほぼ完存		
134	27-2	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	38.2	5.5	2.5	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
135	26-2	井戸枠・横材	B	a*b11	SE4	42.0	5.7	0.8	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
136	27-1	井戸枠・縦材	B	a*b11	SE4	36.3	6.0	2.7	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
137	26-1	井戸枠・縦材	B	a*b11	SE4	34.7	5.6	2.3	先端にケズり痕。表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
138	19-1	井戸枠・縦材	B	a*b11	SE4	88.0	7.5	5.8	先端にケズり痕。中央に孔あり	スギ	一部欠損	転用材	
139	19-2	井戸枠・縦材	B	a*b11	SE4	90.7	6.5	4.3	先端にケズり痕。中央に孔あり	スギ	一部欠損	転用材	
140	18-1	井戸枠・縦材	B	a*b11	SE4	63.9	14.9	2.3	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
141	25-1	礎板	B	b-12	pit2	14.0	13.5	3.5	表面に加工痕、直径3.3cmの穴あり	スギ	完存	転用材か?SB1	
142	25-2	礎板	B	b-12	pit2	15.0	12.0	4.0	表面に加工痕、直径3.1cmの穴あり	スギ	完存	転用材か?SB1	
143	24-1	礎板	B	b-c-12	pit1	9.8	8.4	4.0	表面に加工痕あり	スギ	一部欠損	SB1	
144	23-1	柱材	B	b-12	pit1	48.4	15.5	13.0	表面腐食激しい	スギ	一部欠損		
145	21-1	柱材	B	—	表探	58.5	12.8	12.9	表面面取り、構状の加工痕	スギ	一部欠損		
146	24-3	不明製品	B	c-12	pit1	17.0	3.6	2.2	中央に構状の加工痕	スギ	一部欠損		

第5表 間ノ田遺跡木製品一覧表

## IV 辻子遺跡(第4次)の調査成果

### 1. 地形及び基本層序

調査前は水田および畠地が営まれていたが、間ノ田遺跡と同じくかつては低地であり、3mに及ぶ盛土が行わっていた。調査は、事業地中央の現道を残し、安全勾配を確保して行ったため、調査可能範囲は調査区底面で50mだけであった。

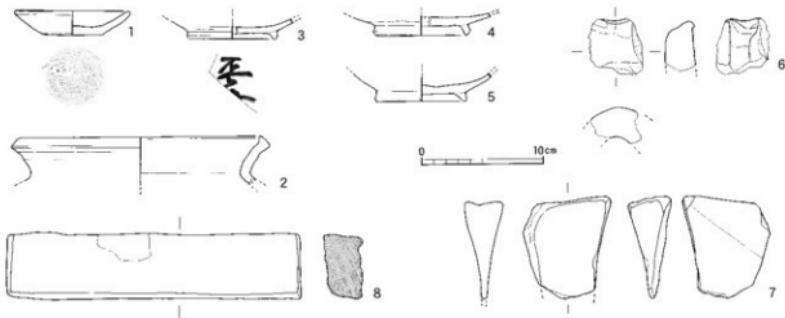
基本層序は、地表下3mまで近代の盛土が行われ、その下で2層の黒褐色シルト層（包含層1）を確認した。灰黄褐色シルト層を挟んで、再び土器を含む黒褐色シルト層（包含層2）を確認した。この層を除去した灰色シルト層上面で遺構面（第1面）を確認した。この層を除去すると黒褐色シルト層（包含層3）を検出し、上面で遺構面（第2面）を確認した。表土下4mで褐灰色シルト層を確認したが、崩

落の危険性があったため、この面で掘削を中止した。

### 2. 遺構と遺物

遺構面第1面では調査区の南端でピットを6基確認したが、いずれのピットからも遺物は出土しなかった。遺構面第2面でも、調査区南端で落ち込みを確認したのみで、調査区北半では遺構を確認することができなかった。

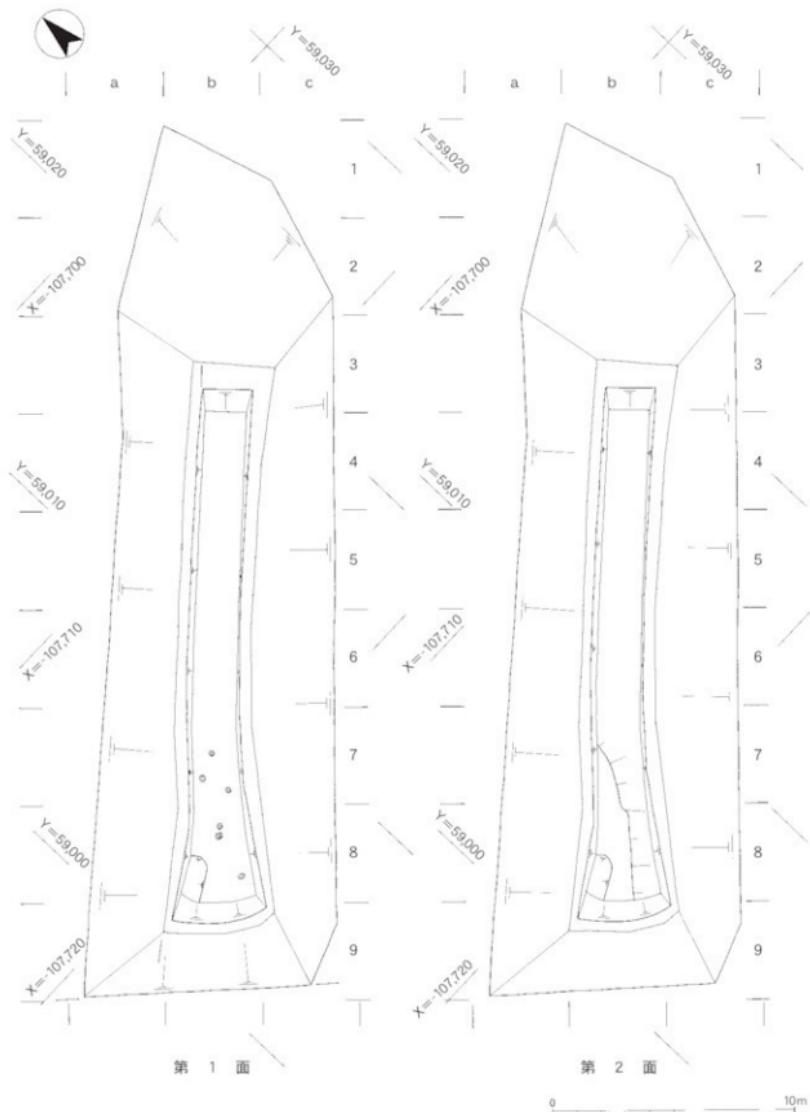
出土遺物はいずれも包含層から出土したものである。1は土師質土器の小皿で、底面に糸切り痕が残る。2は土師器壺である。3～5は灰釉陶器で、3の底部には墨書きが記されている。上の文字は「平」であろうか。6は輪羽口の小片である。7は砥石で上下2面に使用の痕跡が認められる。8は木製品。表面の大半が腐食しており、加工痕などは不明。



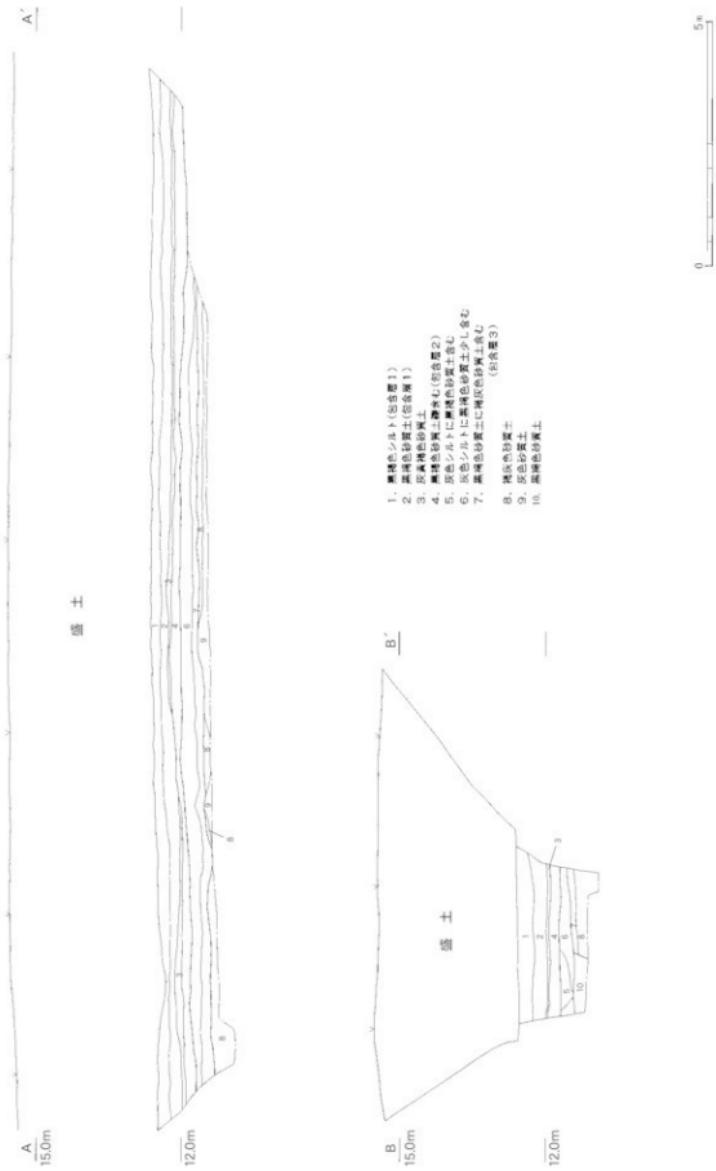
第21図 辻子遺跡出土遺物実測図（1：4）

番号	登録番号	種別器形	グリッド 遺構・層	計測値(cm)	調整	胎土 焼成	色調	残存	備考
1	2-2	土師質土器 皿	b5 包含層	口径 9.5cm 器高 2.0cm	クロナデ、底部糸切り痕	粗良	鈍い黄 橙		やや歪みあり 底径4.8cm
2	2-1	須恵器 壺	b8 包含層	口径 21.2cm	ナデ	密不良	鈍い壺	口縁 2/12	
3	2-5	陶器 灰釉陶	b5 包含層	台径 7.5cm	ロクロナデ、貼り付け高台、底部ロクロケズリ	良	灰白		
4	2-3	陶器 灰釉陶	b8 包含層	台径 8.0cm	ロクロナデ、貼り付け高台、底部ロクロケズリ	良	灰白	5/12	
5	2-4	陶器 山茶碗	b8 包含層	台径 7.5cm	ロクロナデ、底部糸切り痕	良	灰白	8/12	
6	3-1	輪羽口	b7 包含層	—	—	良	灰白	小片	
7	3-2	砥石	b6 包含層	—	—	良	—	小片	3面使用
8	1-1	木製品	b8 包含層	長さ 24.2cm 幅 5.3cm	—	良	完形	厚さ3.2cm	表面の腐食激しい

第6表 辻子遺跡遺物一覧表



第22図 汗子遺跡遺構平面図 (1 : 200)



第23図 辻子遺跡土層断面図 (1 : 100)

## V 結語

### 1. 間ノ田遺跡

間ノ田遺跡では、主として3期の遺構を確認した。第1期は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭、第2期は中世前期で灰釉陶器の百代寺窯式から山茶椀藤澤編年の第3型式までの時代、第3期も中世前期で藤澤編年第5型式を中心とした時代である。

#### ・第1期(弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭)

この時期の遺構は、方形周溝墓2基と土坑2基を確認したのみである。方形周溝墓SX30は削平されていたものの埴丘部のほぼ全域を確認し、周溝の一端が開口する方形周溝墓であることが確認された。周溝の2カ所から甕・器台・壺が出土し、部分的に供獻されていたものと考えられる。隣接する方形周溝墓SX6は、埴丘の半分が調査区北西側に展開するため、全容は明らかにはならなかったが、周溝が途切ることから、SX30と同じタイプのものと考えられる。

#### ・第2期(平安時代後期～末期)

この時期の遺構としては、掘立柱建物2棟、井戸2基、井戸状土坑1基、溝1条を確認している。掘立柱建物建物SB1は4間×3間の総柱建物で、調査区東側に更に展開する可能性もあるや大型の建物である。方形井戸枠が確認されたSE4は、位置関係からSB1に関連する物であろう。掘立柱建物SB2は柱穴から出土した遺物より同時期の建物と考えたが、SB1と大きく方向を異にしており、第3期に下る可能性も考えられる。

#### ・第3期(鎌倉時代)

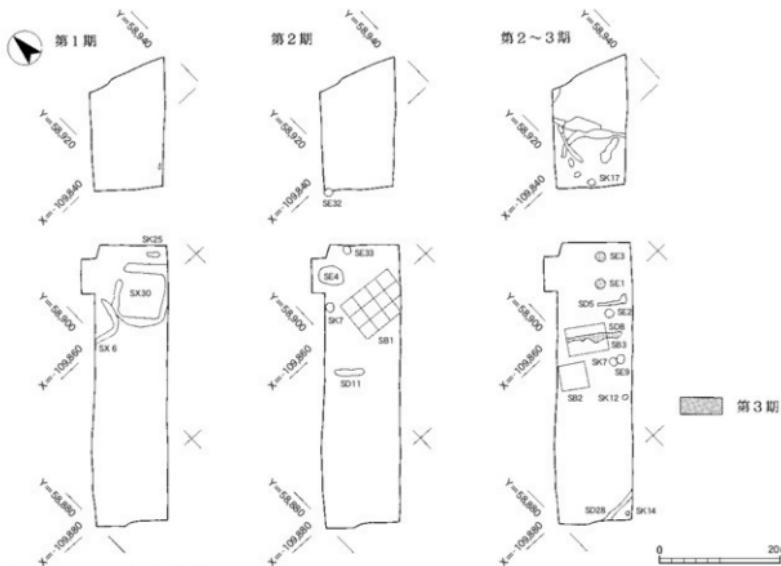
この時期の明確な遺構としては、井戸2基、土坑1基、溝1条を確認しているのみであるが、出土遺物が少なく時期を明確にできなかった遺構の大半は主に第2期から第3期に属するものと考えられる。また、掘立柱建物SB3についても、時期は明確にならないが、掘立柱建物SB1や周囲の井戸等の位置関係から、第3期に属するものと思われる。

これらのこと踏まえて考えると、間ノ田遺跡では第1期の弥生時代後期頃には主な遺構は方形周溝

墓しか見られないことから、墓域であった可能性が考えられる。地形に見ると、間ノ田遺跡のすぐ北西まで、朝日丘陵から派生した小丘陵が伸びてきており、間ノ田遺跡周辺の地形もこれに続いて微高地が南東方向に向かって舌状に伸びていたと考えられる。B地区においても南に行くにつれて遺構が減少しており、今回の調査地が微高地の縁辺に位置していると思われる。従つて、これらの方形周溝墓は、小丘陵から続く微高地の西側縁辺部に築かれたものであろう。また、かつての辻子遺跡の調査では弥生時代後期初頭の集落や水田跡が確認されており、こうした集落の縁辺部であった可能性も考えられる。

第2期から第3期の中世前期には、中世集落が展開する。間ノ田遺跡の中世集落は、辻子遺跡で確認された中世集落と同じ微高地上に位置しており、集落の存続時期も百代寺窯式期から山茶椀の藤澤編年第5型式を中心とした時代まで存続していることなど、辻子遺跡と同様の動向を示している。こうしたことから、2つの遺跡は同一集落で、間ノ田遺跡は辻子遺跡の縁辺部にあたる可能性が高いと考えられる。辻子遺跡では、百代寺窯式期の灰釉陶器が大量に出土していることや、大型の掘立柱建物群が形成されることから、朝明川の水運に携わった有力者層が居住していたことを想定しているが、間ノ田遺跡もその一端を形成するものであろう。今回の調査では中世の水田跡は確認されなかったが、B地区の南半部分や調査区の南西部一帯に広がる低湿地部分に水田が形成されていた可能性が考えられよう。

間ノ田遺跡では多数の井戸や井戸状土坑が確認されたが、これらのうち、井戸SE1～3・9・井戸状土坑SK12は、ほぼ1列に並んで確認されている。これらはいずれも第3期のもので、間隔は4.75m～7.5mとやや異なるものの、一定の規格性を持った配置と思われる。掘立柱建物SB3やピット列などについてもこれらの方向に沿うものが見られることから、井戸列に直行する形で短冊状の小規模な地割りが行われている可能性が考えられ、溝SD5・8は区画溝にあたるのかもしれない。



第24図 間ノ田遺跡遺構変遷図（1:800）

また、間ノ田遺跡では、若干ではあるが土師質土器（ロクロ土師器）が出土している。土師質土器は辻子遺跡をはじめ、東員町の村前遺跡やいなべ市北勢町の塚原遺跡など北勢地域で多数確認されている。間ノ田遺跡でも土師質土器の台付皿や台付小皿、小皿の類が出土し、いずれも11世紀中頃～後年に収まるものであった。この他、京都系土師皿や清郷型鍋にも僅かに出土している。京都系土師皿は、いずれも調整が粗く、在地産のものと考えられるが、こうした土器の出土は、間ノ田遺跡が朝明川ルートを介して畿内や伊勢湾岸地域と広く交流を行っていたことを示すものであろう。

今回の間ノ田遺跡の調査では、弥生時代後期には低地部でも方形周溝墓が展開することを確認した。中世前期には集落が営まれ、短冊形の地割りが行われている可能性もあることが窺えた。間ノ田遺跡の中世集落は辻子集落の縁辺部を形成していたものであり、今回の調査成果は朝明川下流域の集落の性格を考える上で貴重な成果である。

## 2. 辻子遺跡

今回の調査では、調査面積が極めて小さくなつたことから、遺跡の詳細を確認することはできなかつた。しかし、3層の中世包含層を確認し、遺構も僅かではあるがピット群や落ち込みを確認した。包含層から出土した墨書き土器は、2文字目が欠損しているが「平安」と読みそうであり、吉祥文字の可能性が考えられる。<sup>(1)</sup>

今回の調査地には中世の遺跡が存在しているものと考えられる。また、中世以前の面については今回調査を行うことはできなかつたが、これまでの辻子遺跡の調査成果や今回の間ノ田遺跡の調査成果から考えて、下層に弥生時代の遺構が存在する可能性は高いと考えられる。

### 【註】

(1) 榎村寛之氏(奈良県立歴史博物館)の御教示による。

### 【参考文献】

・ 徳裕昌・角正淳著「第10章 遺構・遺物のまとめと考察」『辻子遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2004



間ノ田遺跡 A 地区全景（南西から）



間ノ田遺跡 B 地区第 1 面全景（南西から）

図版 2



間ノ田遺跡 B 地区第 1 面全景（北東から）



間ノ田遺跡 B 地区第 1 面北端部（南東から）



間ノ田遺跡B地区第2面全景（北東から）



間ノ田遺跡B地区第4面全景（北東から）

図版 4



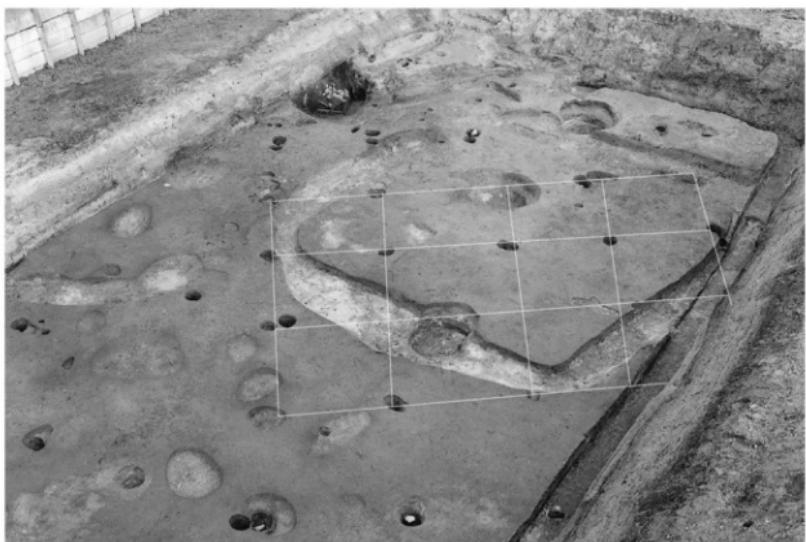
間ノ田遺跡 B 地区 SX 30全景（南東から）



間ノ田遺跡 B 地区 SX 30土器出土状況（西から）



間ノ田遺跡B地区 S X 30土器出土状況（東から）



間ノ田遺跡B地区 S B 1（南から）

図版 6



間ノ田遺跡B地区SB3（西から）



間ノ田遺跡B地区SE1井戸枠出土状況（南西から）



間ノ田遺跡B地区S E 3曲物出土状況（北西から）



間ノ田遺跡B地区S E 3完掘状況（北西から）

図版 8



間ノ田遺跡 B 地区 S E 4 (南東から)



間ノ田遺跡 B 地区 S E 4 井戸枠・遺物出土状況 (北から)

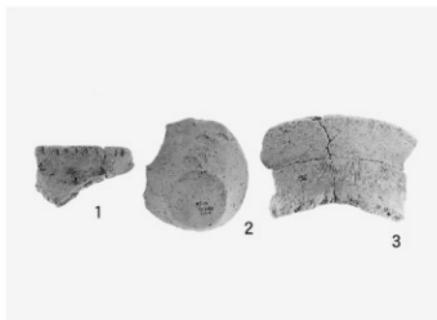


間ノ田遺跡 B 地区 SK 7 遺物出土状況（北西から）



間ノ田遺跡 B 地区 b 14 · pit 3 遺物出土状況

図版10



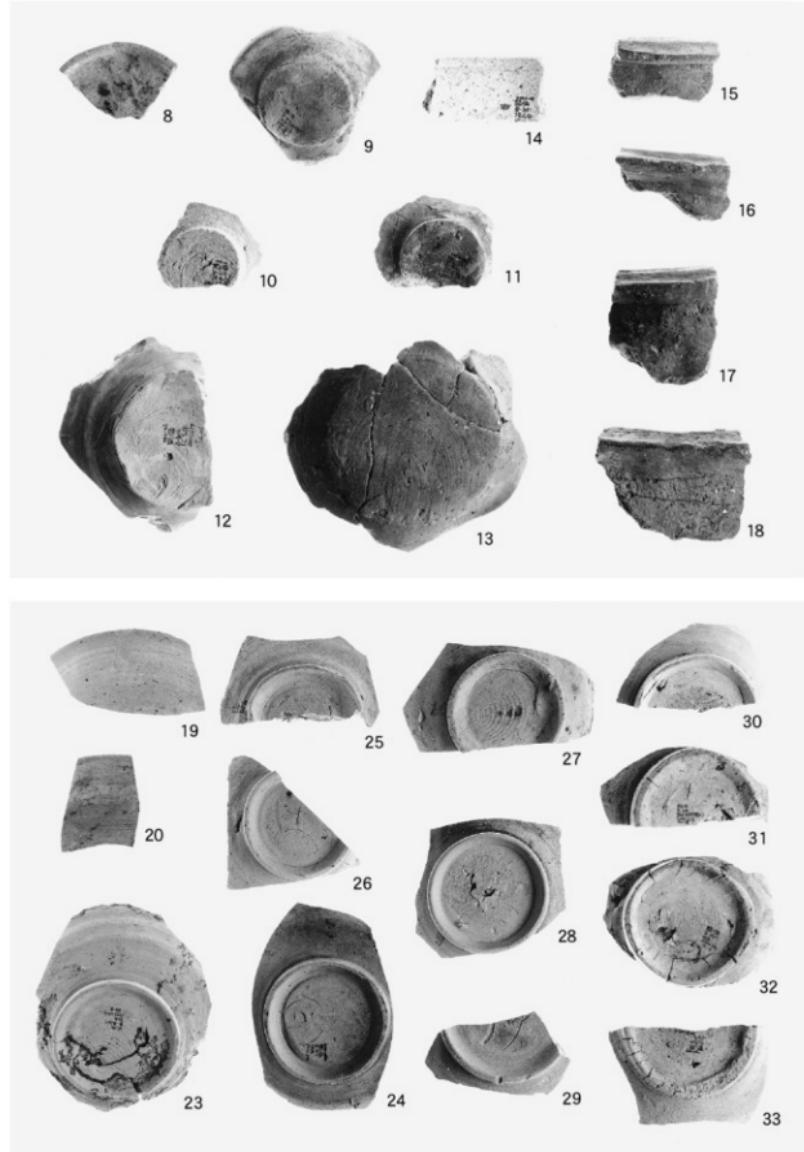
S X 30 (1~5)



S X 6

S K 25

図版11

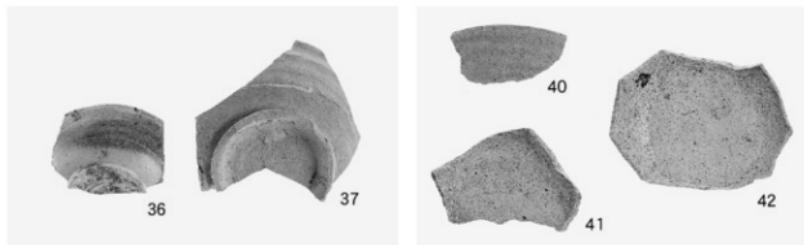


S E 4 (8~33)

図版12



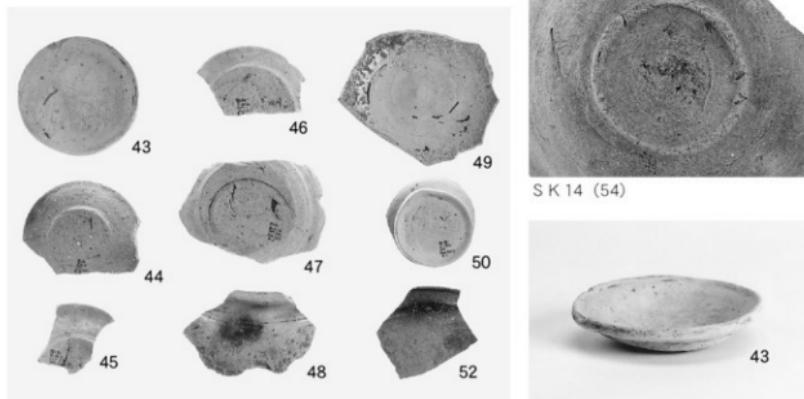
S E 4 (21~35)



S E 33 (36~42)

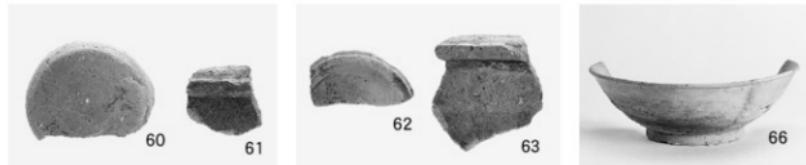


S E 1 (38・39)



S K 7 (43~52)

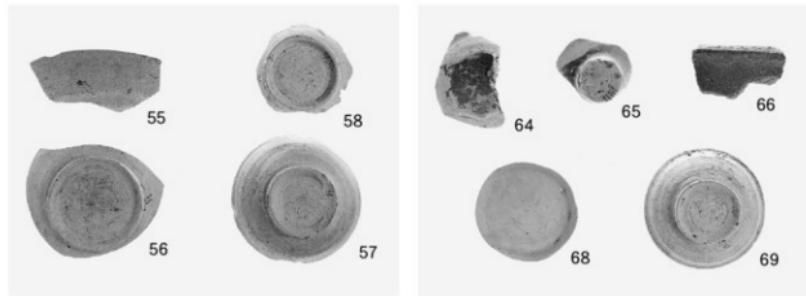
図版13



SB 1 (60・61)

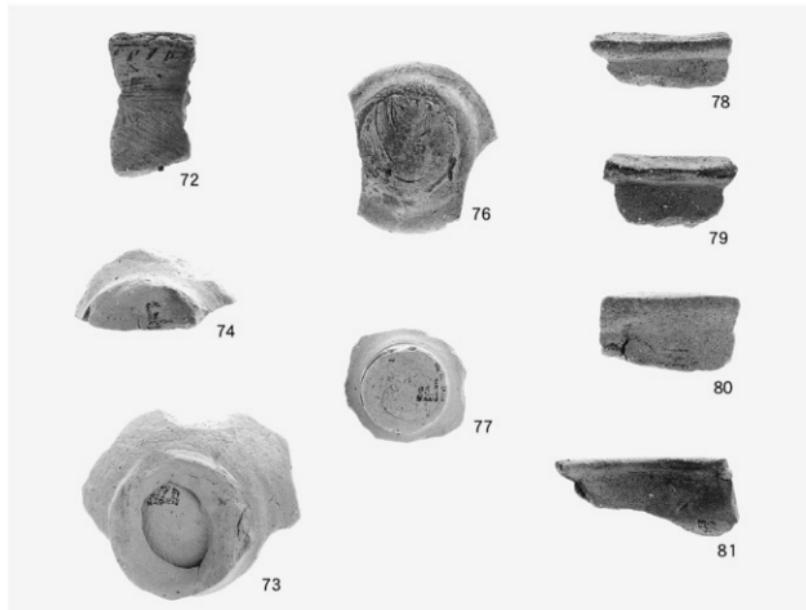
SB 2 (62・63)

b 14 + pit 3



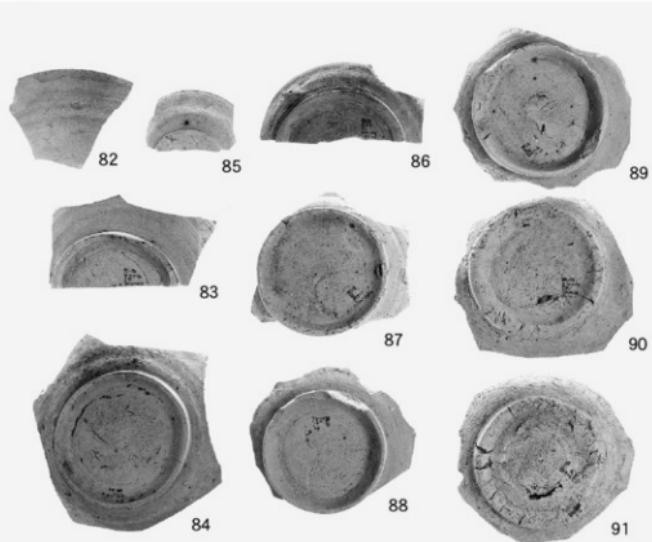
SD 11 (55~58)

その他遺構

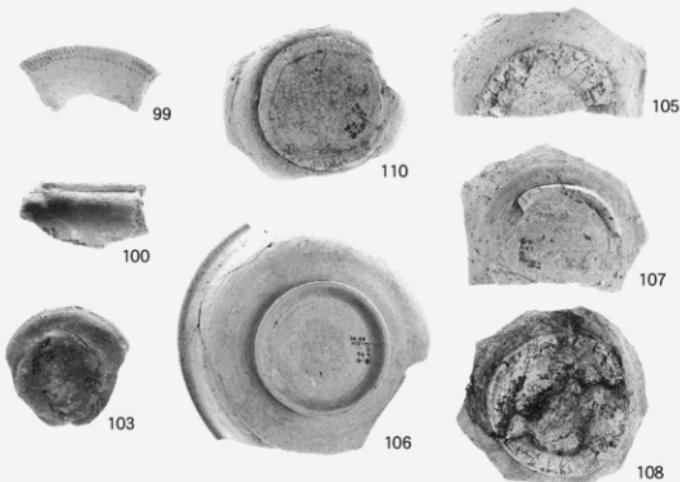


B地区包含層

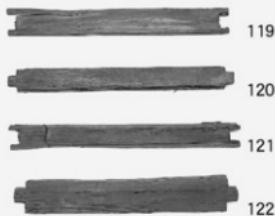
图版 14



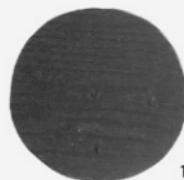
B 地区包含层



A 地区包含层



S E 1 (119~123)

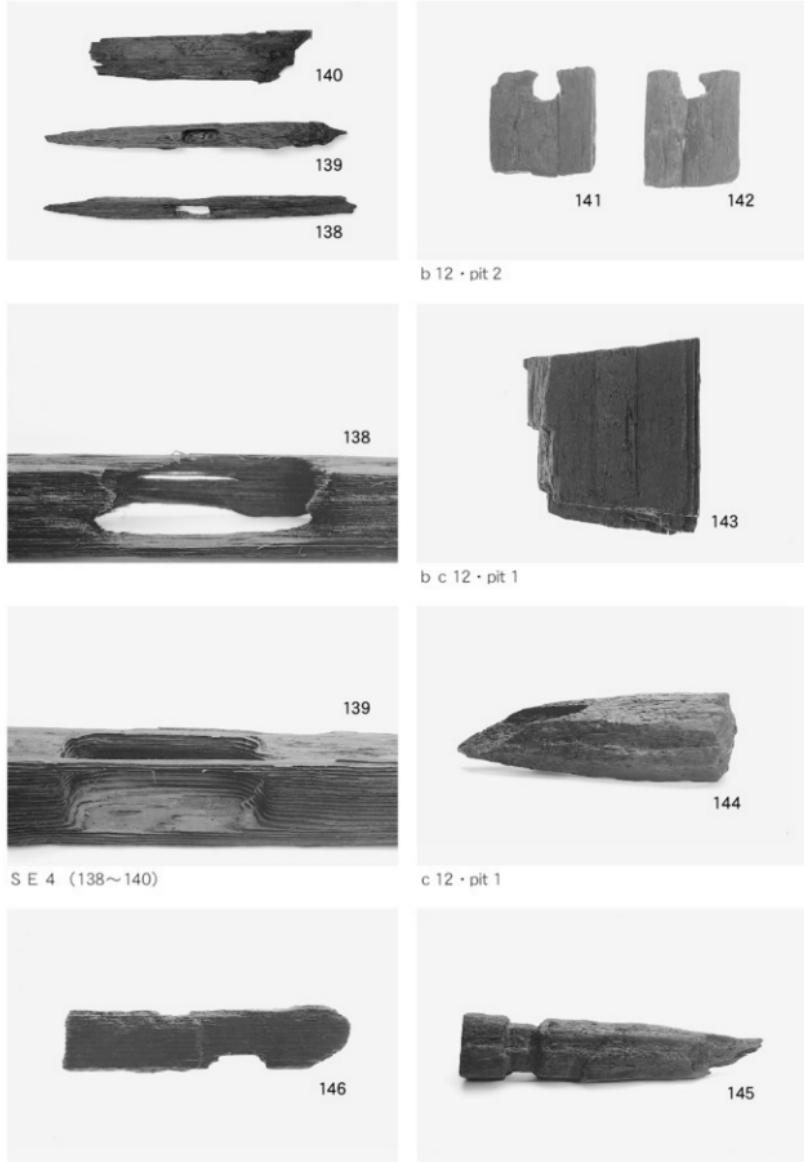


S E 3 (125~127)



S E 4 (128~137)

図版16



c 12 · pit 1

表採

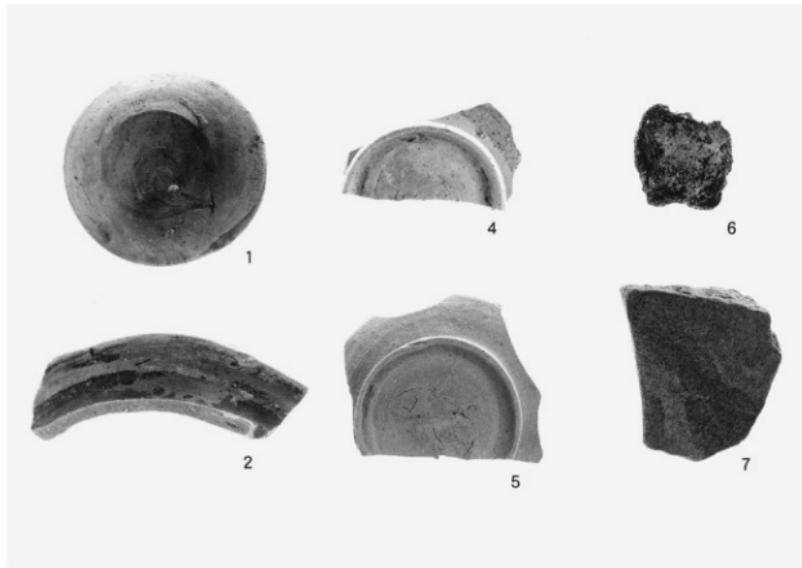


辻子遺跡第1面南半部（南西から）



辻子遺跡第2面全景（南西から）

図版18



包含層

## 報告書抄録



三重県埋蔵文化財調査報告 258

間ノ田遺跡・辻子遺跡(第4次)  
発掘調査報告

2005(平成17)年3月  
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 ㈲山文印 刷

間ノ田遺跡正誤表

		誤	正
P 19右	下から 8 行目	100	102
P 19右	下から 6 行目	102	100
P 21	第15図	<b>20</b>	<b>21</b>
P 21	第15図	<b>21</b>	<b>20</b>
P 22	第16図	<b>83</b>	<b>85</b>
P 22	第16図	<b>85</b>	<b>83</b>
P 23	第17図	<b>100</b>	<b>102</b>
P 22	第17図	<b>102</b>	<b>100</b>
P 27	第2表 42行目	底部完存	底部6/12
P 27	第2表 43行目	底部4/1	底部完存
P 28	第3表 83行目	11-9	12-8
P 28	第3表 85行目	12-8	11-9